

---

# うつほ物語。

八百奈 雨人沙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うつほ物語。

### 【Nコード】

N9171R

### 【作者名】

八百奈 雨人沙

### 【あらすじ】

ある日突然、いいんちよこと雪広あやかの弟に転生した。

そして芽生えたのはあらゆるものを誤魔化す程度の能力。

戯れに魔法を極めてみたり、美少女を愛でてみたり。

ただ一つ言いたいことがあるとすれば……………なんでお前が居ないんだろいうな。

俺にとっての『本当』は、お前だけだったのに。こればかりは、嘘じゃない。

『本当』を求める偽物。

偽り、欺き、騙し続ける。

幸せに嘘も本当もないということに、少年はまだ、気づかない。

## 始まりの始まり（前書き）

この物語はフィクションです。実在する人物、団体、事件とは一切関係ありません。

## 始まりの始まり

夢とも現とも知れぬ虚空。周囲を満たすのは、ただひたすらに虚無。その中で、真っ白な異空間が、宙を漂うように存在していた。主を内包することで、一つの異界として完結していたその空間からは、卒倒しそうなほどの神々しさが感ぜられた。

——異界の中に溢れかえった、ゲームや漫画などの下界の嗜好品が無ければ、見る者に更なる感慨深さを与えたに違いない。ついでに言えば、異界の主の容姿が年端もいかぬ金髪の童女でなかったならば。

そんな、えらく俗っぽい異界の主と共に、一人の少年がそこに居た。

決して端正な顔立ちではないが、人を安心させる穏やかな顔つきをしている。

普段の少年を知る者からすれば驚愕に値する、壮絶な覚悟が秘められた目を携えて、少年は童女と向き合った。

「……本当に、それで良いのかの？」

童女は神妙な顔つきで尋ねる。

老成した口調と舌足らずな声音のアンバランスさに、少年は一言もの申したい気分になったが、それには触れないことにした。

「はい。それが、僕の彼に対する精一杯のお礼で——唯一の、贖罪だと思っんです」

「ま、構わんがの。儂は知り合いに頼まれただけじゃし。ついでじやから、何か能力でもつけておくかの。下界で流行りの……てんぷれ？ とかいふやつなんじゃろ？」

「さあ……。僕はその辺りのことは詳しくないもので。ただ、本人は喜びそうですね」

「んむ。何にしようかの……。型月の能力が定番じゃが、先に送り込んだあやつと被るし……。無難に某シューティングゲームの能力にしとくかの」

童女は軽快な口調で呟き、すっと手を掲げた。掌から淡い光が漏れる。神性を放つ光は宙を漂い、見えない何かに溶け込むように霧散した。

「さて、これでお主の片割れは大丈夫じゃろ。あやつもおるし、滅多なことでは死ぬまい」

「……ありがとうございます。おかげで、もう何も思い残すことはありませんん」

「どっちじゃ」

「あはは、冗談です。大丈夫ですよ」

冗談めかして微笑む少年に、童女は呆れた目を向ける。

「ほれ、次はお主の番じゃ。転生を断ったのじゃから、お主の処遇は——分かっておるな？」

「……はい」

「では、行くぞ」

「はい」

童女の言葉と共に、少年は目を閉じた。瞼の裏に浮かぶのは、自らの片割れ。

祈るように両手を重ね合わせ、少年は願う。

——どうか。どうか、幸せに生きてください——。

そうして、始まった。

偽りに満ちた少年が、たった一つの本当を見つけるための物語が。

※～※～※

「……………あー？」

ぶっちゃけ状況が理解できん。

視界は不明瞭で、思考も曖昧。自分が寝ているということぐらいしか分らない。

周囲の情報を得る手段は耳のみで、そこから拾う声は、何やら色めき立った幼い少女の声と、慈しむような妙齡の女性の声。

「あっ！ 目を開けましたわお母様！」

「ええ。そうね、あやか」

少女の名前はあやかというらしい。

そのあまりに無垢な声から、自分に危害を加える存在ではないと判断し、安堵する。それから、ようやく自分のことについて考えを巡らせた。

海市空<sup>うみいちうつほ</sup>。それが俺の名前だ。どこにでも居る、誠実な正直者である男子高校生だ。嘘だ。  
それはともかくとして。

——俺は確か、車に轢かれた筈である。

あの時ばかりは流石に死を覚悟したが、どうやらしぶとく生き延びたらしい。それもこれも日頃の行いが良いおかげだな。嘘だけど。とすると、ここは病室だろうか。先ほどから聞こえてくる二人組の母娘らしき声に聞き覚えはないが、もしかすると俺を轢いた男性の家族かもしれない。

それにしても女性の声がやけに穏やかだが、今はどうでもいい。問題は、目を開けているにも関わらず、まったく目が見えないことである。

事故の影響で視神経に支障をきたしてしまったのだろうか、自らに起こった変調に動揺を隠しきれない。

他にも異常がないか確認しようと手足を動かして——気づいた。あまりに短い手足。やけに比重が大きい頭。これではまるで——赤ん坊のようだ。

（かつ、身体が縮んでる!?!）

それなんてコナン君!?! と驚愕する。

（いやいやいや、アポトキシン4869でも吞まされたのか俺は!?!）

何が起こったのか本格的に知りたくなったが、そこで急激な眠気



と僅かな頭痛に襲われた。  
許された思考は一瞬。

（ないわー）

ドン引きしながら、俺はこれが夢であることを願いつつ、意識を手放した。

※～※～※

夢じゃなかったよコンチクショウ。

目を覚まして真っ先に自分の身体を確認して、絶望した。どうやら本当に身体が縮んでしまったらしい。

俺が何かしましたか神様？

それとも神様は敬虔な子羊を地獄に落として嘲笑うサディストだったのか。滅べそんな神。

本当にどうしてこうなんだと、自らに訪れた不幸を嘆いてみると、キィと扉を開ける音がした。

物音を立てないようにゆっくりと扉が閉められてから、そろりそろりと足音が近付いてくる。俺のすぐ傍でピタリと立ち止まる侵入者。

はて誰だろうかと思案していると、耳元でふふっ、と小さな笑い声。声からして、侵入者はどうやら先ほどのあやかという少女のようだ。

「よかった。起きてたんですね、空ちゃん」

「うー……？（ん？ 何故に俺の名前を。つーかちゃん付けはやめい）」

「そう、あなたのお名前は空ちゃんって言うんですのよー」

「あう……（いや、知ってるけど。何この生まれたての赤ん坊に言い聞かせるような言い、かた、は……）」

待て。

思い至った可能性に、冷や汗をかく。

事故以前によく読んでいた小説の一ジャンル。子供を助けて車に轢かれたりして死んだ主人公が、異世界で転生を果たすという、いわゆる転生モノ。

もし、それが自分の身に起こっているのだとしたら。

実は俺はあの時に死んだのだとしたら。

そんな荒唐無稽な考えを裏付けるかのように、少女はにこやかに告げる。

「わたくしの名前はあやか。あなたのお姉ちゃんですよ」

「ふぎやつ……（転生フラグキタ——！！）」

それから半年後、自分が『ネギま』の世界に転生し、少女が『あの』雪広あやかだったのだと気づいて再び驚愕するのは、また別のお話。

## 始まりの始まり（後書き）

こんにちは、八百奈です。

お気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、拙作は再投稿した作品です。詳しくは活動報告をご覧になって、八百奈のアホさ加減を笑ってやって下さい。

再投稿した作品、ではありますが、若干設定や展開に差異があります。なにぶん記憶に頼って書き直しているもので。

拙作を楽しんでいたいただいていた方は、本当に申し訳ありません。お詫びといっではなんですが、この作品を精一杯面白くしていきたいと思っています。

初めての方に説明いたしますと、拙作の主人公は、あやかが七才のときに流産した弟のポジションに転生した、嘘つき野郎です。

拙作ではあやかが三才のときに生まれたという設定です。憑依とかではなく、単にポジションを乗っ取っただけです。

可愛いのは正義、面白ければ全て良しを信条にする主人公が、いろいろ引っかき回すお話。

ほのぼのしたり、イチャイチャしたり、バトったりします。お楽しみに。

## 傷んだ赤色

作為的な転生。

降って湧いた能力。

さて、これは誰の采配だ？

(……ま、誰でも良いんだけどな)

せっかくの二度目の人生、楽しまなければ嘘だ。

だって、あの『ネギま』だぞ？

しかも、能力持ちだぞ？

感謝こそすれ、文句なんて欠片もない。

神様だか何だか知らんが、これからは毎日欠かさずお祈りしてあげよう。嘘だけど。

まあ、とりあえず。

俺のネギまライフは、こうして始まった。

※～※～※

「……空ちゃん、起きてますかー？」

また来た。

稽古を抜け出してきた我が姉を見て、思わずため息を吐く。

そんな俺の様子に気づくことなく、姉上は俺の寝ているベビーベッドを覗き込んだ。仕方なしに無垢な笑みを見せて、差し出された小さな手を握ってあげると、姉上はにぱぁーっと弾けるような笑みを見せた。

鮮やかな金髪に、緑の瞳。イギリス人である祖父の血を色濃く引いたその容貌は、日本人離れしている。

目鼻立ちには幼い柔らかさがあるのだが、同時に端麗な容姿が持つ、気品のようなものがうっすらと漂っていた。我が姉ながら、えらい美少女である。

「ふわぁ……何度見ても可愛いですわー。将来は格好よくなること間違いなしですわね」

（あ、それは同感。齡一歳にしてこの顔は異常）

生まれて間もない頃は目が見えなかったのだが、生後半年を過ぎると視力はほぼ見えるようになった。

その頃にたまたま鏡で見たのだが、幼齡にして非の付け所のない精錬されたようなその容姿に、自分のことながらまるで金縛りにあったように、一瞬呼吸さえも停止した。

太陽の光をそのまま紡いだかのような金糸の髪に、宝石のように艶やかで澄んだ翡翠色の相貌。鼻筋は通って、唇は薄く形がよい。

それら整ったパーツがさらに絶妙に配置されており、ベビー服に包まれた姿は作り物の人形であると言われても納得できそうなほど、現実離れしていた。

最初はこのあり得ない容姿の持ち主が自分であることに違和感を抱き、どうにも焦れたいむず痒さを感じたものである。

数ヶ月かけてなんとかこの金髪翠眼の赤ん坊が自分であると認識した。しかし、そうなると今度は自己陶醉に陥る危険性が浮上したので、目下対処を検討中だ。拙者、ナルシストだけは御免でござる！

「それにしても、そろそろ空ちゃんも言葉を覚える頃ですわね。初めて口にするのは『ねーね』が一番嬉しいのですが……」

「こら、両親を差し置いてなにを抜け駆けしようとしてのの貴女は」  
姉上の両脇に手が差し込まれたかと思うと、ひょいと抱き上げられた。シンプルなフォーマルドレスから覗く、細く綺麗な脚が目飛び込んでくる。

「あっ！ お、お姉様？ たしかフランスにいらっしゃった筈では……」

「少し用事があって、こっちに戻ってきたのよ。それより、また稽古の途中で逃げ出したそうね、あやか。きちんと受けなければ、教えてくれる先生にも失礼だと言ったでしょう？」

身の丈の倍ほどの高さまで抱き上げられた姉上は、慌てたように首だけ振り返り、相手を確認する。

最初から見えていた俺からすれば当然の展開であるが、姉上のサボりを窘めるためにやって来たのは橙香姉<sup>とうか</sup>だった。

飾り気のないタイトな黒色のズボンに、新品みたいにパリッとさせた白いワイシャツ。長い髪を結び、首筋をあらわにした橙香姉は、どこかの社長秘書のように見える。普段かけているシックな眼鏡も、そのイメージを後押しする。凜とした雰囲気纏うその姿は、俺から見ても魅力的だと思う。

橙香姉は雪広家の長女である。

未だ成人前の身なれど、その類い稀なる才覚を発揮し、父の仕事を手伝って世界中を飛び回っている。家に帰ってくるのはごく稀だ。姉上も、橙香姉が帰ってくるのは想定外だったに違いない。

「ううー……。お稽古が大事なのは分かってますわ。でも、空ちゃんのことを気になって手がつかないんですの」

「……気持ちは分からなくもないけど、だからと言って稽古を怠けて良い理由にはならないわ。そんなの空だって迷惑よ」

拗ねたように口を尖らせる姉上に、橙香姉は困ったように窘める。まあ、俺も眠くない時は暇なので姉上の相手は苦ではないのだが、やるべきことをやらないというのは感心できない。

抱き上げられた格好のまま俯く姉上に対し、橙香姉は名案とばかりに閃いた。

「じゃあ、こうしましょう。空があやかのことを『ねーね』って呼んだら、稽古を頑張ること。良いでしょう?」

「空ちゃんが……ですか? それはもちろん、とても嬉しいです、お稽古も一生懸命頑張れますけれど……」

橙香姉の突拍子のない提案に、姉上は戸惑いながら頷く。やがて二人の視線はおのずと俺に集まる。姉上はおずおずと期待に胸を膨らませながら、橙香姉は確信に満ちた表情で、それぞれじっと見つめてくる。

(……え? いつの間に俺が話すフラグが。いや、別に良いんだけどさ)

舌足らずではあるが、言葉を話すのに不自由はしていない。このことを知っているのは、今のところ橙香姉のみだが。

「……う、空……ちゃん?」

「ほら、空。あやかのことを『ねーね』って呼んであげて?」

不安げに消え入りそうな声で尋ねる姉上と、聖母のごとく微笑みながら俺を促す橙香姉。

その期待に答えるべく、俺はゆっくりと小さな口を開く。蕾が花開くような、満面の笑みを添えて。

「……ねーね」

静かに、しかしハッキリと紡がれた三文字の言葉が、姉上の胸に深く突き刺さる。

「う……空ちゃんが……。空ちゃんがわたくしのことを『ねーね』って……？」

「ええ。良かったわね、あやか」

ふるふると感動に身を震わせる姉上を、橙香姉が慈しみを持って抱きしめる。それからようやく下に降ろされた姉上は、しばらく動かなかった。

「……………お姉様」

「なあに、あやか」

「わたくし、頑張りますわ。空ちゃんのお姉ちゃんとして、恥じることのないように」

静かな決意。

しかし、よほど固く心に誓ったのだろう。引き締められた表情がそれを物語る。

「……出来ればそこは雪広家の人間として、と言ってほしいところだけれど。まあ、及第点ね」

橙香姉もそれを感じとったのか、満足気に微笑みかける。姉上も



それに笑みを返すと、再び俺のほうに向き直った。

「空ちゃん、見ててください。空ちゃんに誇れるように、一秒でも早く一人前の女性になってみせますわ」

きゅっと俺の小さな手を握りしめ、姉上は真剣に語りかけてくる。どんな顔をすれば良いのか分からないでいると、姉上はそのまま部屋から出ていった。稽古に戻るのだろう。

「……やれやれ。私がいくら言っても聞かなかったと言うのに、ただ言葉を発しただけでこれか。一歳児の癖にもう魔性を身につけているのかお前は？」

口調がガラリと変わる。口調だけではない。纏う雰囲気そのものが、聖母を思わせる穏やかなものから、研ぎ澄まされた一振りの刀のように鋭利なものに変わっていた。

気づけば、橙香姉はいつの間にか眼鏡を外していた。

「……知らんよ。そんなもん」

「くくっ。まあ、もともとそんな達者に話す一歳児など見たこともないがな」

「っーか、ああいう行動は慎めよ橙香姉。姉上が疑問に思ったらどうすんだよ」

「そんなもの、お前の能力で《誤魔化す》だけだろう。あやかはお前を溺愛しているからな、ああいう方法が一番効果的なんだよ」

「この女狐が……」

「何とでも言え。舌足らずな声で罵られても可愛らしいだけだぞ？」

口元に皮肉気な笑みを浮かべる橙香姉に、小さく舌打ちをする。憎々しげに橙香姉を見ながら、思う。あまりにも似すぎていると。

型月作品のほぼ全てに何らかの繋がりを持つ人形遣い——蒼崎橙子に。

橙香姉——雪広橙香は、転生者である。

どういう経緯で転生に至ったかは不明だが、橙香姉は『ネギま』の世界に雪広あやか姉として転生した。

そしておそらく、俺だけがその身に異能を宿して生まれてきた理由、橙香姉との決定的な差異は、互いの前世にあるのだろう。

俺の場合は現実から物語への転生だが、橙香姉は物語から物語への転生——つまり、橙香姉は型月世界の住人だったのだ。

それも、蒼崎橙子の学院時代の後輩で、尚且つ本人は同一化魔術とかいう反則じみた魔術を扱う一流の魔術師だったらしい。

そして、蒼崎橙子に心酔していたとも聞いたことがある。それが転じてか、橙香姉はかの人形遣いをあり得ない精度で模倣していた。容姿や口調（どうけい）だけではない。人形師としての卓越した技術や、魔術師としての造詣（ぞうけい）の深さ、またその在り方。常人では絶対に至り得ない極地に、彼女は至っていた。同一化魔術とやらのおかげだそうだが、詳しいことはよく分からん。

色々と非常識な我が姉を眺めていると、これまた非常識なことに、橙香姉は胸ポケットから煙草を取り出し火をつけた。

「おいそこのヘビースモーカー、赤ん坊の前で煙草を吸うな。お前にはモラルってものがないのか」

「ないよ。煙草を吸わないモラルなんて滅べば良いのさ。煙が嫌なら適当に結界でも張っておけ。空間を《誤魔化せ》ば簡単だろう？

まったく、ふざけた能力だ。精神干渉のみならず、理や因果、概念への干渉までやってのけるんだからな」

「自分と寸分違わぬ自動人形を造る奴に言われたかねえよ」

「数を《誤魔化す》だけで全く同じ結果を作り出せるお前にもな」

とるに足らない言い合い。橙香姉と話す時はたいていこんな感じ

だ。しかし、仲が悪い訳ではない。橙香姉は人としての優しさとか義理とかが圧倒的に欠けてはいるが、尊敬すべきところは確かにある。

ちなみに先ほどから会話にちらほらと出てくる俺の能力についてだが。

俺の持つ異能は『誤魔化す程度の能力』。その名の通り、あらゆるものを《誤魔化す》ことができる。

あらゆる不利益を都合の良いようにねじ曲げ、それを真実とすることが可能な、そんな素敵にふざけた能力だ。

「ああそうだ、忘れていた」

「あん？」

「土産だ」

橙香姉はポケットから指輪を取り出し、こちらに放ってきた。それを能力を使って空中に押し留める。

窓から射し込む陽光を反射して鈍い光を放つ、無骨な指輪。小さなプレート部分にはラテン語で『魔術を発動する指輪型のワンド』と記されている。

「……えーと。これってもしかして、魔法発動体か？ ラカンとかタカミチとかが持つてる」

「その魔法発動体だ。魔術師の私が持っていたても無用の長物だからな。お前にやる」

「それはありがたいけど……どこで手に入れた？ この血痕のついた指輪」

「仕事の途中で西洋魔法使いと殺り合うことがあってな。その時にたまたま」

「たまたまじゃねえよ！ 何やってんのあんた！？ 父上の仕事の手伝い云々はどうなった！」

「建前に決まっているだろう。誰がそんなつまらんモノを手伝うというんだ。私は死んでも御免だよ。ああ、違ったな。私が死んでも次がある。言い直そう、第二第三の私だろうと御免だ」

「どこの魔王だよテメエは！」

「レディーに向かって失礼なことを言うなよ。またおしめを換えてほしいのか？」

「調子にのってすいませんでした」

あの恥辱は二度と御免だ。能力で羞恥心を《誤魔化し》ても、所詮はその場しのぎ。記憶から抹消しない限り、後々思い返すたびに死ねる。

「……で、まだ何か用か？」

「いや、別に。元々屋敷には荷物を取りに戻っただけだからな。お前はとっとと昼寝でもしていればいい」

「そうする。赤ん坊の身体は眠くて仕方がないからな」

皮肉な笑みを浮かべる橙香姉を眺めながら、俺は眠りにつくことにした。目を閉じるだけで、眠気に襲われる。寝入るのに十秒もかからないだろう。

「じゃあな、弟よ。私は原作とやらには欠片も興味がないから適当にやるが、お前は好きにするといい。ああ、それとな。心配しなくても家は私が継いでやるよ。そのくらいは姉としてやってやる」

そんな言葉と共に頬を撫でられた気がしたが、おそらく気のせいだろう。そのまま俺は昼寝を敢行した。

## 秘密のお茶会

雪広家本邸。その二階にある図書室は、橙香姉が父上に頼んで増設されたものだという。今では専ら俺や姉上の学習室として使われている。

ちょうど今も、教育係のメイドさんに勉強を教わっているところだ。

図書室には様々な分野の書物が本棚に陳列されており、調べものには事欠かない。医学関係の書物が多いのは、橙香姉の要望が反映された結果だろう。人形遣いとしての性質故か、橙香姉は医学にも精通している。

改めて雪広財閥の財力を実感していると、教育係の美奈さんが何やら感嘆のため息を吐いた。泣きボクロがチャームポイントの、シヨートボブの美人さんだ。ついでに巨乳。

「はー……空様は本当にお出来がよろしいですね。私が教える意味もほとんどないかもしれません」

「そんなことないよ。美奈さんの教え方が良いからだって。それに美奈さんの授業、楽しいし」

「ふふっ。嬉しいことをおっしゃって下さいますね。ですが、少し心配です」

「えっ？ 何が？」

「まだ三歳なのに、空様ったらお上手なんですもの。将来女たらしになってしまわれないか心配です」

「ははっ、大丈夫だって。ぼくは美奈さん一筋だから」

「……っもう！ そういうところが心配だと申し上げているんです……」

とまあ、こんなふうにイチャついてる訳だが。メイドさん最高。ほんのり頬を赤らめてる美奈さん可愛いっす。

美奈さんから習うのは一般教養の他に、帝王学や経済学なども含まれる。幼少期の脳というのは湯水のごとく知識を吸収するので、そういった馴染みのない学問も難なく身につけることができた。座学以外の礼儀作法などの稽古も、多少手こずってはいるが、危なげなくこなしている。

（それよりこの若さでそれだけのものを教えられる美奈さんって何者なんだろうなあ）

噂ではまだ十代という話だし、よほどの才媛なのだろう。こんなところでメイドをやっている理由がいまいち理解できん。まあ、俺としては大歓迎だけど。

橙香姉に魔法発動体の指輪を貰ってから二年。能力の練習と平行して、俺は魔法の練習も行うようになった。ただ、それには一つだけ問題がつきまとう。

練習場所には事欠かない。雪広家の庭は広大。能力を使って空間遮断の結界を張ることで、適当な場所に一種の異界を作り出せるからだ。『本物の』魔法使いと同等の業を易々で行えるのに、どうして西洋魔法使いごときの使う魔法を学びたがるのか理解できない、というのは橙香姉の弁だ。

そのあたりはあの人が魔術師という生き物だからだろう。結果が同じなら過程なんてどうでもいい、そういう考え方の人種だから。

橙香姉はわかってない。魔法が使えるという事実は、ひどく男心をくすぐるのだ。なんなら厨二病患者だからと言い換えても構わない。

## 閑話休題。

問題というのは、西洋魔法に関する知識が圧倒的に欠けていることだ。術式に関する理解もなしに、呪文をただ唱えるだけで使える魔法なんて基礎の基礎。

橙香姉曰く才能はあるらしく、魔法の射手やいくつかの基本魔法はすぐに使えたのだが、そこから先で壁にぶつかってしまった。橙香姉は色々忙しいし、何よりあの人は西洋魔法を嫌ってるから教えてくれるはずもない。（戦利品の）魔法発動体をくれたのだからほんの気まぐれだ。

という訳で、最近では効率的な魔力運用や、魔法に能力を応用した戦闘法などに力を入れている。

いったい何と戦うんだという話だが、原作介入するつもりなので戦闘力はあるに越したことはない。

「……空様？　　どうかなされましたか？　　先ほどこらボーツとされているようですが……」

「ああ、いや、なんでもないよ。少し疲れたみたいだ」

「そうですか。では今日はここまでに致しましょうか。それに、もうそろそろ——」

「ただいま帰りましたわ空ちゃアアあああああんッ！」

美奈さんの声は、屋敷内に響き渡る絶叫に掻き消された。それと同時に、バタバタと階段をかけ上がる音。

「——あやかお嬢様もお帰りになられたようですし」

「……だね」

顔を見合わせて苦笑する。二番目の姉上は順調にブラコンとして成長していた。

ほどなくして、図書室の重厚感漂う木製の扉が開かれる。わずかに開かれたそこから、ひょいと金髪の少女が顔を覗かせる。

俺の姿を見つけるなり、姉上はパーッと表情を明るくする。そのまま勢いよく扉が押し開かれたかと思うと、姉上はそのまま飛びかかるように俺に抱きついてきた。顔面が姉上の薄い胸で塞がれる。く、くるしい。

「ただいまですわ空ちゃんっ！ とっても寂しかったですわ！」

「わぷっ……。お帰り、あやかお姉ちゃん。今日も学校、お疲れさまっ。ぼくも寂しかったよ？」

息苦しさから逃れようと非力な両腕で姉上を押し退けてから、姉上の顔を見上げてにっこり笑顔。この時小首を傾げるのを忘れないのがポイントだ。

その仕草に魅了された姉上は、「空ちゃんっ！ 空ちゃんっ！」と興奮した様子で抱きしめてくる。姉上の小さな頭が、俺の右肩に載る。身体が密着して、姉上の細い腕が俺の首に回る。

ぎゅ。

そのまま為すがままにされていると、しばらくして姉上は満足気に離れた。

「ふー……。もう少しで空ちゃん分が充電切れになるところでしたわ」

「……ちなみに充電切れになるとどうなるの？」

「禁断症状が出ますの」

「ふ、ふーん。大変なんだね、お姉ちゃんも……」

中毒性のある謎のエネルギーを姉上は溜め込んでいるらしかったが、墓穴を掘りそうなので深く追及しないことにした。

ちなみに今更ではあるが、俺は周囲に対して猫をかぶっている。



素で接しているのは今のところ橙香姉くらいだ。

別に他者を拒絶しているとかそういうトラウマチックな理由ではない。家族のことは橙香姉を含めて大好きだし、俺なりに大切に思っている。

要するにこれは、趣味だ。幼い無垢な子供という演技を楽しんでいるのである。初対面の相手に対する精神的防衛という側面もあるにはあるが。

え？ 姉上？ 姉上はほら、反応が面白いから特別。思えばこういう行為が姉上のブラコン度合いに拍車をかけているのかもしれないが、敢えて言おう。手遅れであると。

「——ええ、それもこれもあのお猿さんのせいですわ……ッ！」

ふと気がつく、先ほどまでご機嫌だった姉上が、いつの間にか怒りをたぎらせ拳を握りしめていた。

お猿さん、とは。

サル目（霊長類）のヒト以外の哺乳類の総称。日本では、特にニホンザルを指すことが多い。野生動物の中ではあまりにも人間に似ていることから、これを狩ったり喰ったりすることを食のタブーとする地域もある。しかし、食用になっている例もあり、中国やヨーロッパでサルを食べていた記録が見られ、日本でも古くから食用とされていた。

というようなものではないだろう。ちなみにこれはウィキ先生に聞いた知識だ。

冗談は置いて、お猿さんとは彼女のことだろう。

神楽坂明日菜。魔法無効化能力の持ち主であり、物語のキーパーソン。

姉上とは犬猿の仲であり（つまり姉上が犬ということになる）、彼女が姉上の通う麻帆良学園に転入してきてからというものの、姉上はあちこち傷をつくって帰ってくるが増えた。当初は両親も心

配していたが、今では慣れたものである。

何はさておき、彼女とは仲良くしておきたいところだ。物語での重要度もさることながら、なんと幼少期の今ならツンデレではなくクーデレのアスナを楽しむことができるのだ。流石はメインヒロイン、一粒で二度おいしい。

そう考えた俺は、早速行動に移すことにした。

「アスナさん、だっけ？ お姉ちゃんがいつも喧嘩してる人」

「ええ、そうですね！ いつもいつも小生意気な態度をとる、乱暴者のお猿さんですよ！」

「会ってみたいな」

「本当に、あのお猿さんはっ！ 今度会ったら絶対にただじゃおきません、わ……？」

ギギギ、と油の切れたロボットののように、姉上がこちらに振り向く。何を言われたのか、理解できないようだ。

「……う、空ちゃん？ 聞き間違いだとは思いますが……。空ちゃんがあのお猿さんに、会い、たい……？」

「うん」

「だっ、駄目に決まっていますわ！ あんな騷のなっていないガサツで乱暴者のお猿さんを空ちゃんに会わせたら、引っ掻かれるのがオチですわよ！」

ひどい言い草である。

本気で会わせたくない様子の姉上に内心嘆息する。とは言え、反對されるのは想定内。説得すれば良いだけの話である。

「……だめ？」

小首を傾げ、ささやく。幼さたっぷりの甘い声で。意識的に目を潤ませ、つぶらな瞳で姉上を見つめる。

「……だめ、なの？」

息がかかるほどの距離に、顔が近づく。その造作の端正さに、姉上が息を呑む。

見つめあうこと三十秒。先に音をあげたのは姉上だった。俺の純真無垢な視線に堪えかねて、顔をそらす。耳まで真っ赤に染まり、肩がふるふると震えている。

「……だ、駄目ではありませんわ……」

「やったー！　ありがとお姉ちゃん！　大好きっ！」

「かふっ……！」

抱きついて止めの一言。それだけで姉上は、鼻血を出して気絶した。

（ふっ、チョロいな）

ニヤリと口角をつり上げ、黒い笑みを浮かべる。

一部始終を見ていた美奈さんが「やっぱり将来が心配です……」などと呟いていたが、気にしないことにした。

※～※～※

そんなわけで、明けて日曜日。

姉上が俺の『お願い』を無下にする筈もなく、無事にアスナを招

待してくれたようである。今は姉上自ら客人を車で迎えに行っている。

俺はというと、アスナの為にお茶会を開くべく、メイドさん達に混じって準備をしているところである。

「はい、美奈さん。ティーカップはこれで良かったよね？」

「ええ、ありがとうございます。ですが空様。わざわざ空様が準備なさらずとも、私共のほうでやっておきますよ？」

食器類をテラスへと運び、美奈さんに手渡すと、美奈さんは遠慮がちにそう告げた。

「こっちが呼んだんだから、ホストとして最大限努力すべきだよ。どうせなら、時間を忘れるぐらい楽しいひとときを堪能して欲しいでしょ？」

「――ごもっともです。流石は空様、そのようなご立派なお考えがあったんですね。差し出がましい真似をしました」

慚愧に耐えられない、とばかりに深く頭を下げる美奈さんに、俺は笑って返す。

「ううん。それに、美奈さん達とこうやって準備するのも楽しいしね」

「そのように仰って頂いて、光栄の極みにございます」

「はは、大げさだってば」

大仰な態度をとる美奈さんに、今度は苦笑する。二人きりの時は割とくだけた感じで接してくれるのだが、それ以外の時は公私を弁えてます、と言わんばかりに他人行儀だ。それはそれで新鮮だけどさ。

他のメイドさん達は、微笑ましそうに俺達の様子を見守っている。彼女らの目には、俺の三歳児らしからぬ態度は、幼い子供が精一杯背伸びしているように見えるのだろう。どうやら姉上と接している時が素だと思われるようだ。真逆なのにな。

「……ふう、これで準備は一通り終わった、かな？」

「はい。あとはお嬢様がお客様を連れてこられるのを待つのみです」「そっか。ま、もうすぐ着くだろうし……っと、噂をすればだね」

屋敷の敷地内に黒塗りの高級車が入ってきた。姉上とアスナを乗せた車は、門の手前でゆるやかに止まる。お抱えの運転手が下りてきて、後部座席のドアを開けた。そこから顔を覗かせたのは、不満気な顔をした姉上と、夕陽色の髪をしたツインテールの少女。

先に下りた姉上に促されて、少女はストンと地に足を下ろした。

その際に、彼女の身につけている鈴の髪飾りがチリンと音を鳴らす。白い簡素なワンピースに身を包んだ彼女は、無表情ながらもどこか気怠そうだった。

既に門のところに待機していたメイドさん達に混じり、俺も彼女らを出迎える。

『お帰りなさいませ、お嬢様。いらっしやいませ、神楽坂明日菜様』  
「ただいまですわ、空ちゃん！ ……約束通り、アスナさん連れってきましたわよ」

「ありがと、お姉ちゃんっ。それから、いらっしやいませ、アスナさん。雪広空と申します。今日はぼくのワガママでわざわざお呼び立てしてすみません」

「別にいい」

柔らかに微笑んで挨拶する俺に、素っ気なく返すアスナ。その態度に案の定姉上が怒り出しそうになったが、「今日はぼく達がもて

なす側なんだから、喧嘩しちゃダメだよ？」と宥めて、俺は話を続けた。

「そうですか、ありがとうございます。今日はアスナさんの為に、お茶会の用意をしてあるんです。こちらへどうぞ」

そう言って手をスツと差し出すと、アスナは無表情のままにそれに手を重ねた。そのまま彼女の手を引き、テラスまで案内する。

その様子を再び姉上が激昂しかけたが、俺の言葉を思い出して、渋々俺達の後ろに付き従った。

傍目から見るとおかしな光景だろう。幼い少女の手をさらに幼い子供が引いて、その後ろには「うゝー」と唸る少女がいる。

テラスに辿り着くと、チェック柄のテーブルクロスに覆われた真っ白なガーデンテーブルと、その上に並べられた色とりどりのお菓子が見えてくる。

チラリとアスナの顔をうかがうと、テーブルいっぱいのお菓子に目の色を変えていた。どことなく気怠そうな眼差しに、興味の色が宿る。

そこら辺はきちんと子供なんだなあ、とどこかおかしそうに笑みをこぼしつつ、テーブルと同じく真っ白なチェアを引く。

「どうぞこちらへ」

「……ん」

俺に促されて、アスナはストンと腰を下ろす。その最中も、視線はお菓子に釘付けた。

各々のティーカップに紅茶が注がれて、お茶会の準備が整った。

「では、始めましょうか。どうぞ遠慮なく召し上がってください」  
「……ん」

アスナは手元に置いてあったほかほかのスコーンを一口。ゆつくりと咀嚼してから、ティーカップを手にとり、紅茶を口に運ぶ。ティーカップがソーサーに戻される音が響いてから、彼女はほわぁ、とため息を漏らした。

「……おいしい」

「それは良かった」

彼女の緩んだ表情を見て、ほんと安堵する。そして、いつの間にか自分が拳を握りしめていたことに気づいた。知らず、緊張していたようだ。思わず苦笑する。

「ハーブティーは、この使用人が？」

「あ、それはぼくがブレンドしたんです。お茶が趣味でして」

そう告げると、アスナは意外そうにパチクリと目を瞬かせた。

「……空が？」

「はい。お気に召しましたか？」

「……うん。とっても」

「それは何よりです」

彼女は目を細めて僅かに微笑んだ。本当に小さな表情の変化だったけれど、驚くほど可憐だった。

やっぱり、美少女には笑顔が似合う。

「って言うか！ 何を勝手に空ちゃんを呼び捨てで呼んでますの！？」

我慢が限界まで達したらしく、姉上がとうとう爆発した。喚く姉上をアスナはつまらなそうな顔で一瞥して、再び俺に向き直る。

「……ダメだった？」

「いえ、好きに呼んでいただいて構いませんよ」

「だって」

どうだと言わんばかりに見返すアスナに、きいーっ！ と齒ざしりする姉上。

（なんだ、結構良いコンビじゃないか、この二人）

思ったよりも感情豊かなアスナに、思わず目を細める。こんな調子で姉上とやりあってれば、そりゃあ明るくもなるか。

俺はくつくつと笑みを溢して、二人の仲裁に入るのだった。そうして騒がしくも暖かいお茶会は、あっという間に過ぎていく。

※～※～※

夕暮れから宵の口までは、あっという間に過ぎて行く。空は赤から紺へのグラデーションを描き、太陽が沈めば直ぐ夜の世界だ。俺と姉上は、アスナを見送りに門の手前までやって来ていた。

「今日はありがとうございました。おかげでとても楽しい一日を過ごすごうできました」

「ふんっ！ 庶民がこんな豪華な一日を過ごせたのですから、空ちゃんに感謝することですわね！」

「うっさいいいんちょ。……今日はありがとう。私も、とっても楽



しかった」

姉上に言い返してから、アスナはポツリと感想を漏らす。彼女の夕陽色の髪は、夕暮れの太陽によく映えて見えた。今日一日で、随分彼女と仲良くなれた気がする。

「それは何よりです」

「うん。……ひとつ聞いてもいい？」

「何なりと」

「いいんちよが、空が私に会いたがってるから来いって言ってた。どうして私に会いたいって思ったの？」

「ああ、それですか」

頷き、小さく手招きする。アスナは俺の意図を察したのか、俺の頭の位置まで屈み、顔を横にずらした。

姉上をこっそりと盗み見る。何が起るのかよく分かっていないようだ。含み笑いしながら、両手を口元に添えて、アスナの耳元に顔を近づけた。

「んなあっ……!？ う、ううう空ちゃん一体何を——ッ！ いっ、今すぐ空ちゃんから離れなさいお猿さん！」

悲鳴を上げる姉上を無視して、そのままアスナに耳打ちする。

「（今日アスナさんにお会いしたかったのは、アスナさんがどんな人か知リたかったからです）」

「……？ どうして？」

「（だって、姉上ってばここ最近ずっとアスナさんのことばかり話すんですもん。気にもなりますよ）」

「……そうなの？」

「（ええ。本人は絶対に認めないでしょうが、アスナさんのことを大事に思っている筈です。よかったら、これからも仲良くしてあげて下さいね）」

「……自信はないけど、わかった」

「（はいっ。それから……）」

「なに？」

「（また、一緒にお茶しましょうね）」

「……喜んで」

そう言っで離れると、アスナは喚く姉上をチラリと見てジト目になる。やっぱ無理、とか思っているのかもしれない。

「アスナさんっ！　　いったい空ちゃんと何を話してましたの！？」

「秘密」

「秘密ではありませんわ！　　何がなんでも話してもらいます！」

話すまで帰さない、と鬼気迫る姉上。アスナは面倒くさそうにあらわっている。このままでは埒が明かないと判断し、俺は姉上の服をつまんで注意を向けさせる。

「お姉ちゃん」

「……な、何ですの空ちゃん？　　このお猿さんに何か妙なことも吹き込まれましたか？」

失礼なことを口走る姉上を見上げ、無垢な笑みと共に、残酷な一言を告げる。

「お姉ちゃんには言えないことだっで、あるんだよ？」

「――っ！？　　な、あ、え……？」

告げられた内容が信じられないのか、言葉にならない悲鳴が姉上の口から漏れた。あまりの衝撃に、そのままピシリと凍りついていく。

チャンス  
好機。

「では、アスナさん。また今度」

「……うん。また、今度」

ブラコンの居ぬ間に別れを告げると、アスナははにかんで手を振る。心なしか名残惜しそうにしながら、彼女は車に乗せられて去っていった。

さて、俺は後片付けといこうか。

「そ、そんな……。嘘と言ってください空ちゃアアああああああああああああああんッ!!」

「~~~~♪」

鼻歌混じりに去っていく俺の背後から、姉上の絶叫が敷地内に響き渡った。

余談ではあるが、この後姉上はショックのあまり丸一日寝込んだ。

## 秘密のお茶会（後書き）

どうも。前回後書きを書き忘れた八百奈です。

雪広橙香についてですが、物語にはほとんど登場しません。間接的に関わることはよくちよくあるんですけどね。

風のように現れて、風のように去っていく。そんなキャラクターです。

ぶっちゃけ橙香は『空の境界』も『ネギま』も一切知らないです。

元は型月世界の魔術師。

蒼崎橙子に心酔してた人で、学院時代の後輩だったとか、完全人格再現の魔術に長けているとか色々と設定はありますけど割愛。

## ぬらりひよんの孫娘

春らしい陽気の四月。

小学生になった子供と親たちが手をつないで入学式に出かけ、桜咲く校庭で記念写真をとるのは、昔から変わらない日本の風物詩だ。

思い出すと学生時代、入学式や新学期の心が浮き立つような季節はいつも桜の咲く頃であり、若人達の晴れやかな門出を桜の花が祝福してくれていた。

もう一度小学生からやり直すという事実には辟易したが、あの光景はいつ見ても、俺の心を郷愁に駆らせてくれる。

ああ、だから。

だからどうか。

もう少し、現実逃避をさせてもらっても良いですか？

「静かに！ 静かにしなさい！」

「うわ、あのセンサーなんかおこってるぞ！」

「きやははは！ あの顔おもしれー！」

「だーもう！ 黙れその馬鹿ども！ 人の話はちゃんと聞きなさいって教わらなかったのか！？」

「ひぐっ……うええん、ママああああ！」

「はいはい、落ち着けて。お前のママは後ろにいるから、な？」

「……おしっこ」

「俺じゃなくて先生に言えよ……。あ、すいません。この子トイレに行きたいそうなんで、連れてつてもらえますか？」

「……ありがとう」

「はいはい、漏らすんじゃないぞー」

「つかたまりです。早く帰ってネットゲしたいのに……」

「お前も手伝えよこのネットゲ廃人……」

……とまあ、こんな感じである。初等部の入学式なんてこんなものなんだろうけどさ。思い出にくらい浸らせろガキ共。

つか、さっきからツンツン頭の大人びた男の子が事態の收拾に奔走してる。うん、彼のことは上条さんと呼ぼう。別にさっきから女の子ばっか助けてるからとかそういう意図はないけど。

閑話休題。

アスナと初めて会ってから三年。平穏で、平和で、平静で。些細なことが大事件で、大事件は些細な事で。そんな毎日を送っていた俺は、とうとう小学校に入学することになった。

既に高校レベルの学習を終え、大学レベルの学問に突入せんとしている俺からすれば、小学校の勉強なんて無価値かつ退屈極まりない一種の拷問であるのだが、義務教育であるならば仕方あるまい。誰もが一度は通る道だ。俺は二度目だけど。

それはそうと、アスナとはあれからも交流が続けている。彼女を屋敷に招くこともあれば（毎回姉上は不満そうにしていたが）、反対に彼女に招かれることもあった。

（……そう言えば、タカミチのあの態度はなんだったんだろうな……？）

アスナが麻帆良に来てからしばらくは、タカミチが彼女の面倒を見ていた。そのためアスナに招待されて遊びにいく際に、家主であるタカミチとも顔を会わせる機会があった。

その際に少しばかり話をしたのだが、彼の俺を見る目には何か妙なモノが混じっていた気がする。

憐憫、懷古、憧憬、畏怖……。どれも見ず知らずの幼い子供に向けるにはおかしく、俺にもそんなものを向けられる覚えなどまるでなかった。ただ、タカミチは俺を通して誰かを思い描いていたような気がする。まさしく気のせいかもしれないが。

まあ、考えても分からないことは考えるだけ無駄だ。古人も言っている、下手な考え休むに似たり、と。

(……さて、そろそろ本当に現実<sup>に</sup>目を向けようか)

ぶっちゃけガキ共が騒いでるのなんてもうどうでもいい。所詮ガキだから。俺が何よりも目をそらしたい存在。

それは……、

「きゃ——！ 空ちゃアああああああんツ！ お姉ちゃんが  
見てますわよ————！」

姉上エ……。

あなた、普段はあんなに良識ある常識人なのに、どうして俺のことになるとそんなにアレな人になるんですか？

こんなクソやかましい体育館の中で、あなたの声が一番目立ちますよ。

あー、俺学校では空<sup>うっほ</sup>じゃなくて空<sup>そら</sup>って名乗ろうかなー。その方が

良い気がする。

「っせーですね……どこのモンスターペアレントですかあれ」

「確かうつほって言ってたよな。可哀想に……。絶対自己紹介の時に微妙な雰囲気が出るぞ」

「けっ、ざまあです。入学早々干されちまえば良いんですよ」

「お前、本当に血も涙もないな……」

ほら、上条さんとその幼馴染みっぽい女の子もああ言ってるし、絶対その方が良いつて。主に俺の心の安寧の為に。

「フオフオフオ、元気があってよいのう」

騒乱の渦とでも呼ぶべき体育館内に、マイク越しに好好爺然とした老人の声が響いた。

途端。あれほどまでに騒がしかった体育館内が嘘のように静まった。

静寂。幼い新一年生達が一斉に声のした壇上を見据えている。そこに居るのは、雪のように白く見事な顎髭を蓄え、後頭部に一房髭まげを結わえた老人。その瞳の奥は、同じく白髪に染まったフサフサの眉に阻まれて窺えない。

そして、何よりもその老人を印象づけるのは、異様に長くぬつと突き出した後頭部。

山吹色の着物に身を包んだその容姿は仙人を思わせ、実に胡散臭かった。

（出たな、ぬらりひょん）

麻帆良学園学园长、近衛近右衛門。

埼玉県麻帆良市に位置する、麻帆良学園都市。明治中期に創設さ



れ、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市。これらの学術機関を総称した、麻帆良学園の最高責任者。

（まあ、学園七不思議にすら数えられるあの後頭部はおいといて）

異様だ。学園長の声には威圧感など欠片もなかった。その奇異な容姿は注目に値するが、好奇心旺盛な小学生からすれば沈黙はむしろ不自然だ。

だいたい、常人には理解の及ばない現象が多発する麻帆良に住む人間なら、この程度の不思議には慣れきっている。

つまりは。

（魔法使いやがったよこのジジイ……）

收拾がつかないからって、一般人に精神干渉系の魔法なんか使うなよ。魔法の秘匿はどーした。

「さて、どうやら静まったようじゃし、始めるとしようかの」

いけしゃあしゃあと云ってのけた学園長の鶴の一声で、厳かに入学式が始まった。この狸爺……。

まあ、俺もそろそろ黙らせようかと思ってたけど。姉上を含めて肅々と入学式が進められていく中、俺は今後のことについて思いを馳せた。

とりあえず、姉上には大嫌いと言ってあげよう。

※〜※※

入学式及びその他雑事が一通り終わり、麻帆良学園本校初等部の校門前は、新入生とその保護者でごった返していた。

彼らの目的は、恒例の記念撮影だ。かくいう俺も、母上と姉上の頼みもあってその中に混じっている。

（まあ、一生に一度きりの事だし構わないけどさ。俺は二度目だけだ）

また懲りずに暴走するかと思われた姉上だが、先ほどの俺の一言がよほど効いたらしい。しおらしく撮影に専念していた。それでも相当数の写真を撮っていたが。

撮影会が終わると、母上は同じく入学式に出席していた保護者と世間話に興じていた。どうやら旧い知り合いらしい。姉上は姉上で、用事があるそうだ。名残惜しそうにしながら、去っていった。

そんな訳で、俺は手持ちぶさたな様子で突っ立っていた。送迎の車はもうしばらくは来ないし、暇潰しになるようなものも持っていない。

（このまま母上を待つしかない、か。古今東西、女性の話ってのは長いんだよなあ）

女性という未知の存在について思いを馳せながら、春めいた長閑な空をぼんやりと眺めていると、突然視界が真っ暗になった。瞼に柔らかくて暖かい感触が伝わる。誰かに目隠しをされているのだと気づく。

「……だーれだ」

「何やってるんですか、アスナさん？」

間髪入れずに看破する。視界を塞いでいる手をどかして振り返ると、茶目っ気溢れる行動をとった声の主はむー、と不服そうに頬を膨らませていた。ええい、いちいち挙動が可愛いな。

「簡単に当てられたらつまんない、うつほ」

「おや、声を聞いても判断がつかないような冷たい人間をお望みですか？」

「そういう問題じゃない」

じゃあどういいう問題なんだろう。乙女心は実に解しがたいものである。

夕陽色のツインテールを揺らすアスナは制服姿だった。何気に初めて見たそれはなかなか似合っていた。

「今日はどうしたんです？」

「空の姿を見に来たの。いいんちよの隣に居たけど気づかなかった？」

「いえ、あの状況で姉上の方に振り向いたら火に油を注ぎかねなかったというか……そもそも隣に居たならあの痴態を止めて下さいよ」

「馬に蹴り殺されるのはごめん」

「アスナさんはぼくと姉上の関係をどこか誤解してませんか？」

「……そんなことない」

「なら目をそらさないで下さい」

なんと言うか、この三年でアスナは変な方向に感情豊かになった。口数も増えたし、最近はクーデレに加えてツンデレの素養も芽生えてきている。

「……なんか失礼なこと考えてる」

「アスナさんは可愛らしいなと思っていただけですよ」  
「かつ……！？ ごほっ、ごほっ！」

俺の邪念を感じとったアスナがジト目で睨み付けてきたので、爽やかに微笑みながら心情を吐露すると、アスナは顔を真っ赤にしながら咳き込んだ。

ちよっぴり涙目になりながら、上目遣いに睨んでくる。うむ、可愛い。

「……そういうことを言うのは禁止」

「嘘は吐けない質<sup>たち</sup>でして」

「……女たらし」

「自覚があります」

アスナの責めるような視線を涼しい顔で受け流す。ふはは、そこの鈍感主人公とは違うのだよ。あ、今度はため息を吐かれた。

「……昔は可愛かったのに」

「いえ、昔からこんな感じでしたよ？」

攻略対象は美奈さんとか姉上とかだったけど。あの頃のアスナはからかいがいが無さそうだったからな！。

初対面の相手にはあくまでも紳士的な態度を貫き、ある程度仲良くなってから徐々に嗜虐嗜好が顔を覗かせると言う罠。

それが信頼の表れでもあるということは、アスナも気づいているのだろう。それでも反発してしまうのはツンデレの性<sup>さが</sup>か。

などと本人に再び睨まれそうなことを考えていると、アスナが俺よりも後方を見つめていることに気づいた。

「あ」

「ん？　どうかしましたかアスナさ――」  
「だーれだっ！」

アスナの呆けたような呟きに首を傾げると、再び視界が塞がれた。  
ええい、またか。

声からして犯人は明白だったが、先ほどのアスナの不服そうな態度を思い出して、一先ずとぼけてみることにした。

「えーと……どこのどなたでしょうか？」

「んふふー、秘密ーっ。自分で当ててーな、ソラくん」

「うーん……。このどことなく間延びした訛りのある声は……って、その名前で呼んじゃ駄目でしょこのかさん」

「あ、やってもーた」

そんな気の抜けた声と共に、目隠しをしていた手が退けられて視界が開ける。

真っ先に目に飛び込んできたのは、再び頬を膨らませてこちらを睨んでいるアスナの姿だった。どうやら自分の時と反応が違うのが不服らしいが、とりあえず放置。

後ろを振り返り、犯人を確認する。

そこにいたのは大和撫子という言葉が似合う、はんなりとした少女だった。自らの失言に思わず両手で口を押さえている。

「あはは。久しぶりやねソラくん」

「あははじゃないですよ、まったく。繰り返しフラグなんて立てないでください。三回目に意表について橙香姉あたりがやって来たらどうするんですか」

「何て言うんだっけ、あれ……。そうだ、前フリだ」

「違います。ていうかそのネタ通じる人がどれくらい居るんですか」

「とりあえずジャンプSQに掲載してるアレはもうただのエロ漫画やと思うんや」

「同感ですけど色々マズイ発言は控えてください」

うん、ネタ会話。

年端も行かぬ女の子に色々自分好みの趣味を仕込んだ結果がこれだよ！

……正直、すまんかった。

閑話休題。

近衛木乃香。あろうことかあのぬらりひょん、もとい学園長の孫娘であり、極東随一の魔力を持つ少女。

元々は京都の出身なのだが、色々と込み入った事情があり、親元を離れて祖父が学園長を務める麻帆良へとやって来たらしい。

さっきも言ったように、時折アスナに招待されることがあり、アスナが入寮してからは寮の方に遊びに行っている。その際に、アスナのルームメイトであるこのかと知り合ったのだ。

……その後二人をオタク趣味に引きずりこんだのは言うまでもない。惨劇なんてなかった。あるのは喜劇と悲劇だけ。

「で、このかさんはどうしてこちらに？」

「アスナと一緒にやえ。ソラくんの晴れ姿を見に来たんや」

「……てことは、あなたも姉上の醜態をスルーしてたクチですか」

「馬に蹴り殺されるのはごめんやからな」

「だからあなた方はよくと姉上の関係を著しく誤解してませんか？」

「べ、別に肉欲に溺れた姉弟なんて思ってへんからなっ！」

「何をツンデレチックに爛れた関係を妄想してますか！ だいたい、まだ身体の準備が整ってませんよ！」

「……つまり、お互いの身体が成熟すれば直ぐにでも貪るように求

めあうつもりなのね？」

「どうあっても近親相姦に持っていくつもりですか。姉上より先にあなた方を頂いて差し上げましょうか？」

「きゃ。飢えた狼が若い性を迸らせて襲いかかって来るえ、アスナ」  
「さりげなく実姉を射程圏内に入れつつハーレム宣言したわね、このか」

お互いの身をひしと抱きしめ合いながら怯えた様相を装う二人に――アスナは無表情のままだが――俺はため息を吐く。

「まったく、どうしてそんな性格になったのやら……」

「間違いなくソラくんの影響です、本当にありがとうございました」

「それほどでもありません」

「それほどのモンやから」

「……責任、とってね」

「良いですよ」

「……………え？」

それまで無表情ながら楽しそうに俺をからかっていたアスナが、俺の予想外の返答に硬直した。

「責任をとって、アスナさんを幸せにします」

「え、いや、あの。ちが……っ！」

真顔で迫る俺に、打って変わって顔を真っ赤にするアスナ。無意識にたじろいで後ろに一步下がるアスナに呼応するように、俺も一步間合いを詰める。

アスナを追いつめる途中、さりげなくこのかに目配せをすると、

心得たとばかりにニンマリと視線が返ってきた。

「式はどこで挙げましょうか？ いえ、それよりもまず神式か仏式かも決めなきゃいけませんね。ウェディングドレス姿のアスナさんも見てみたいですけど、和装も捨てがたいです」

「しっ、式……っ！？ う、あ、こ、このか……っ！」

意味を成さない言葉を発しながら、アスナは親友に助けを求める。だが残念、その親友は背信者<sup>ユダ</sup>なのだよ。

「おめでとう、アスナ。結婚式はウチも呼んでな？ 今からスピーチの内容考えとくから」

「はは、気が早いですよこのかさん」

「ええなー、アスナ。こんなカッコええ旦那さんが見つかった。しかも玉の輿やし」

「……………う」

「う？」

「うにゃあああああああああ！」

あ、壊れた。

桜舞い散る麗らかな春、少女の羞恥に満ちた声が響き渡る。

奇怪な叫び声と共に崩れ落ちるアスナを眺める俺とこのかの目は、やはり笑っていた。



## ぬらりひよんの孫娘（後書き）

どうも。深夜のテンションで二人の少女を毒牙にかけた八百奈です。もう朝ですけどね。

どうしてこうなった……。

さてさて、次回はどうしましょうかね……。やりたいお話は色々あるんですけど。

とりあえずほのぼのと学園生活でもやって、そのうち本格的に非日常でも繰り広げましょうか。橙香っていう便利なキャラも増えまして。

お？ ひょっとして、二つ名獲得できるんじゃないか？

うん。できる、できるぞ！

ヒャッハアアアアアアアアアア！！

この世も捨てたもんじゃなかったんだね！

よし、頑張るよ兄さん！

……兄さんって誰だろう。

まあいいや。

ではでは、八百奈でした。

## 番外 エヴァンジェリンの受難（前書き）

今回はエイプリルフルにちなんで急遽執筆した番外編です。

## 番外 エヴァンジェリンの受難

エイプリルフール

四月一日。嘘についても許されるという夢のような風習のあるその日は、世界中の嘘つきが最も輝く一日である。

世界中で新聞が嘘の内容の記事を掲載したり、TVニュースでジヨークニュースを報道したりといった事が広く行われている。

そしてそんな日だからこそ、私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは最大級の警戒心を抱いていた。

何につて、そりゃあ、決まってるだろう。あの大嘘つきの腐れ外道に対してだ。

空のヤツがエイプリルフールを免罪符にいったい何をしでかすか、分かったもんじゃない。

（ナギが帰ってきたただの何だのと毎年毎年私を騙しおって……！  
今年は騙されんからな！）

ヤツのやること為すこと全て偽りと食ってかからねば、また足元をすくわれる。

幸いにも今日は春休みだ。家でのおんぶりポテチでも食いながらレトロゲーでもやっていよう。ヤツに会わなければ済む話だ。

だが、そんな私の思惑を邪魔しようする訪問者は当然のように現れた。

「マスター、ただいま帰りました」

「ん？ おお、茶々丸か。買い出しご苦労」

「いえ。それと、マスター……」

「まだ何か用か？ 茶々丸」

買い出しから戻った我が従者である茶々丸を労い、再びゲームに戻ろうとする。だが、いつもならそのまま下がる茶々丸が、その場に残ったままだった。

不思議に思い寝転んだまま振り返ると、茶々丸は何故か何も持っていないかった。

「……荷物はどうした？ 買い出しに行ったんだろう？」

「はい。それは――」

私の問いに茶々丸が答えようとすると、玄関からガサガサとビニール袋の揺れる音と、足音が聞こえてきた。

「茶々丸さん、荷物はキッチンに置いておけば良いかな？」

「ええ。ありがとうございます、空様」

「いいよ、このくらい。女の子に重いものを持たせるのは心苦しいしね」

「私はガイノイドですので、この程度の重量ならば運搬には何の支障もありませんが……」

「意識の問題だよ。ぼくからすれば茶々丸さんは紛れもなく女の子なんだから。それに茶々丸さんの役に立てて嬉しいしね」

「……ありがとうございます」

「どういたしまして」

そんなふう to 他人の従者とイチャつきながらやって来たのは、私と同じ金の髪を持つ少年だった。

人形遣い、雪広橙香の弟であり、私が今日最も会いたくなかった人間。

「きつ、貴様……！」

「ん？ おお、エヴァか。邪魔するぞ。つかお前はまたそんな格

好でゲームをして……」

「私のことはどうでも良い！ 何故貴様がここにいる！？」

「何故って、見りゃ分かるだろ。茶々丸さんの荷物運びだよ。なんだ、とうとうボケたか吸血鬼？」

「くっ……！ 貴様らは姉弟揃って私を馬鹿にしおって……！」

声を荒げて青筋を立てるが、空はどこ吹く風とばかりにキッチンに立ち去った。

……落ち着け、私。このままではヤツの思う壺だ。深呼吸をする。冷静さを取り戻してから茶々丸に事情を聞けば、空とは道すがら偶然会ったのだという。ヤツはいつものように野良猫に餌をあげていたんだそうだ。……相変わらず動物には優しい輩だ。それから成り行きでウチに招待することになり、その最中に荷物を持ってもらったらしい。

心なしか頬を紅潮させながらたどしく報告するポケロボに苛立ちつつ、私はヤツの対応を考える。

適当にもてなしてさっさと追い返すのが得策ではあるが……それならそれで何をしでかすか分からん。

以前そのまま邪険にして追い払ったら、ログハウスごと上空五百メートルまで飛ばされたことがある。何が誤魔化す程度の能力だ。明らかに『程度』じゃないだろ！ おまけに茶々丸とチャチャゼロだけ安全な場所に転移させおって！

思い出したらふつふつと怒りが込み上げてきた。私があの時どれだけ驚かされたか……！

ログハウスがゆっくりと下降して元の位置に戻ってから、ヤツがドッキリ成功のプラカードを掲げながら、満面の笑みを浮かべて家に入ってきた時は、本気で殺してやろうかと思った。

あいつの姉もたいがい理解不能な思考回路をした人でなしだが、ヤツは更にその上をいく。他人を弄ぶことで愉悦を感じ、その為なら平気で嘘をつく人間の屑。つくづく思う、地獄に落ちろと。

話が逸れたが、つまるところヤツを野放しにしておくのは危険だ。今日一日見張っておかねばならん。私の心の安寧の為に。

「……何してるんだ、エヴァ？」

固く拳を握りしめて決意していると、キッチンから戻ってきた空が怪訝そうな顔つきでこちらを眺めていた。

「いや、何でもない。ああそうだ。確か貴様、紅茶が趣味だったな？」

「ああ、日本茶も好きだけどな。それがどうかしたか？」

「少しばかり珍しいものが手に入ってな。せっかくだから貴様にも分けてやる」

「……………お前、ホントにエヴァか？」

「何が言いたいッ！」

あり得ないものを見たと言わんばかりにたじろぐ空に、思わず怒気をたぎらせて吼える。

「いやだって……なあ？ あのジャイアニズム精神旺盛な自称悪の魔法使い（笑）が……………ないわー」

「お前、心の底から私を馬鹿にしてるよな？ なあ？」

「そんな訳ないだろ？ 恐れ多くもかの『闇の福音（笑）』『人形使い（失笑）』『不死の魔法使い（嘲笑）』『悪しき音信（爆笑）』

『禍音の使徒（憐憫）』『童姿の闇の魔王（哀愁）』を馬鹿にするなんて……………くっ」

「ならその言葉の端々に込められた悪意をどうにかしろ！ というか途中から哀れみが混じってないか！？」

「別に福音か禍音かどっちかにしろよとかは思っていないぞ」

「嘘をつけ！」

「ああ、嘘だ」

こいつ、本当に殺してやろうか……ッ！  
殺意に震えるが、このまま襲いかかつてはそれこそヤツの思う壺。  
再び深呼吸。

「……茶々丸、準備をしろ」

「かしこまりました、マスター」

「って、マジでご馳走してくれんの？」

「当然だ。客をもてなさずに帰しては家主の名折れだ」

「んじゃ、ありがたくいただくのか」

そうこうしている間にも、茶々丸が紅茶を丁寧な手つきで用意していく。

用意されたティーカップ、砂時計などの品々はどれも一級品だ。  
私は日本茶の方が好みだが、やるからにはとことんやらねば気がすまないからな。

茶々丸が砂時計で時間を見計らい、ゆっくりと紅茶を注いでいく。  
ティーポットから注がれる紅茶が、鮮やかなオレンジ色の放物線を  
描く。

「この色と香り……カンヤムか？」

私は、よく分かったな、と少し自慢気に頷く。

「その通りだ。貴様とて、そう簡単に手に入る品ではないだろう？」

カンヤムとは、ネパールとインドの国境地帯で栽培される、生産  
量が非常に少ない紅茶。殆どが欧州方面へと輸出されるので、国内  
では手に入りにくく、日本では幻扱いされている代物だ。

「まあ、確かにカンヤムはあまり飲まないな。でも良いのか？ 相当貴重なものだろう」

「こういったものは独り占めするものではあるまい。素直に好意を受け取っておけ」

「そりゃ、光栄なことだ」

軽口を叩きあう私達を尻目に、茶々丸はクッキーを盛った大皿を運んできて、テーブルの中央に配置した。

「どうぞ、召し上がって下さい」

「ん、遠慮なくいただくよ」

私も椅子につき、用意された紅茶に口をつける。ダーズリンによく似た芳醇な香りが鼻腔を刺激する。そのままカップに口をつけながら、紅茶とクッキーを楽しんでいる空を盗み見る。

今のところ大人しくしているようだが、ヤツがこんな絶好の日に何もしないなんてことはあり得ない。毎年標的はまちまちだが、今日ウチに来たということは、何かやらかすに違いない。

（まったく……。大人しくしていれば、まあ、なんだ。見れない容姿ではないというに……）

鮮やかな金糸の髪に、翡翠色の瞳。その恐ろしいまでに整った容姿には、私とて目を奪われるものがある。

ヤツがここまで徹底的に壊滅的な性格をしていなければ、あるいはもう少しまともな出会い方をしていれば、万が一にも心を奪われるようなことがあったかも知れん。

……。まあ、もしもの話を考えても詮無きことだが。



（だいたい、なんでこいつは私に対してだけ態度がこんなに違うんだ！？ 茶々丸には紳士的な態度をとっておいて、その主である私にはぞんざいな扱いとはどういう見だ！）

こいつが周囲に対して猫をかぶっていることは知っている。実の姉にさえ、だ。橙香の方はどうか知らないが。

猫をかぶるとは、本性を偽るということ。ならば、既に本性が知られている茶々丸にも猫をかぶり続ける必要がどこにある？

……あるいは。

私に気を許しているからこそ、素で接してくる……？

（ハッ、あり得んな）

唐突に浮かんだ考えを一笑する。いくらなんでも荒唐無稽すぎる。

（……だいたい、もしそうだったとして、どうするとうんだ、私は）

私と雪広空との関係は、おそらくずっとこのまま変わらないだろう。

こいつが私をからかって、私がそれに怒って。軽口を叩きあい、このつまらない人生を少しでも面白おかしく過ごそうと日々を過ごす。

それでいい。それ以上は望まないし、望むべきでもない。

性格は最悪だが、どういうわけかこいつの回りには人が集まる。皆、こいつを慕っているのだ。

私がその中に交じるのは、どう考えても場違いだ。和やかで騒々

しいメロディーに混ざる、一つの不協和音。どうしたって不自然だ。ただ、もしかしたら。

この長い停滞の中で、私が変わることを望んだならば。この檻の中から、連れ出して欲しいと求めたならば。こいつはそれに、応えてくれるだろうか？

(……くだらん)

人並みの幸せを望むには、私は殺しすぎたし、長く生きすぎた。今さらどうしろと言うんだ。年頃の娘のように愛を囁けというのか。無茶を言うな。そんなものの、恥ずかしくてできるか。

無理矢理思考を中断させる。全ては詮無きことだ。何もかもが、遅すぎた。

くいつとカップを傾けると、僅かな雫が口を潤す。いつの間に紅茶を飲み干してしまっていたようだ。

それからふと空を見ると、ヤツもこちらを見ていた。ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべている。

「……なんだ、その笑みは」

何となく思考が見透かされていたような気がして、ぶっくらぼうに問いかける。すると、ヤツはさらに笑みを深める。

「別に？ 可愛いなと思ってただけ」  
「ぶっ！」

思わずむせる。いったい何を言い出すんだこのたわけは！

「くだらん嘘をつくな、殺すぞ」

「嘘じゃねーよ。ただ純粹にそう思ったただけだ」

「ハッ。どうせ誰彼構わずそう言っているんだろう。死ね、女の敵」  
「まあ、割と言ってるけどさ。それは単に俺の周囲に可愛い女の子が多いからだし。嘘はついてないぞ。エヴァは可愛い」

ええい、何なんだこいつは！ 普段そんなことを一切口にしないクセに今日に限って——今日？

今日は、何の日だ？

そう、四月一日。エイプリルフールだ。

——つまりこれは、嘘か。

そう認識した途端、急に頭が冷えていくのが分かった。

そうかそうか。今年はそういう趣向なのか。思わず笑いが込み上げてくる。

……死ねばいいのに。

「……え、エヴァ？ どうしたんだ？ 急に笑いだして」

「——貴様には失望したよ、空」

「は？」

「貴様は本当にどうしようもない屑だな。よくもまあ、そんなふう  
にヘラヘラと笑ってられるものだ」

「え、いや。何故に唐突に罵倒？ 俺なんかしたか？」

困惑の表情を浮かべる空。本当に訳が分からないと言わんばかりの態度に、再び笑いが込み上げてくる。本当に、演技の巧いヤツだ。だが今は、苛立たしさを増長させる要因でしかない。

「出ていけ」

「いや、出ていけっておま」

「出ていけと言っている！」

そのまま空を家から叩き出した。抗議の声を無視して、勢いよく

玄関の扉を閉め、鍵をかける。

「マスター？ どうされたのですか？」

「どうもしない。私は部屋に戻るから、しばらく入るなよ」

オロオロと困惑している茶々丸を放って、私は自室に駆け込んだ。ボスン、とベッドに身を投げて、うつ伏せに寝転ぶ。そして、苛立ちのままに拳を打ちつけた。

唇を噛みしめながら、何度も何度も拳を打ちつける。その度にベツドがボスン、と情けない音を立てた。

悔しかった。

あのような低俗な嘘をついた空に対して、ではない。

あの程度の軽薄な言葉に踊らされ、一瞬でも喜びを感じた私自身に対してだ。

あんな最低な人間に安らぎを感じ、あまつさえ淡い希望を抱いてしまった私の弱さが、何よりも悔しい。

どうして。

どうして。

どうして……………ッ！

「…………マスター」

「…………茶々丸か」

ノックと共に入ってきた従者に見向きもせず、うつ伏せのまま、枕に顔を埋める。

茶々丸は部屋の入り口に突っ立ったまま、私に話しかけてきた。

「マスター、どうされたのですか？ 突然気分を害されて……。空様の態度に、何か問題でもありましたか？」

淡々とした問い。なのに、私には責められているように感じた。

「……茶々丸。今日は何日だ？」

「はい？ 今日……ですか？ 三月三十一日ですが、それが何か？」

「そうだ、四月一日だ！ エイプリルフルなのを良いことに、ヤツは最低な嘘を————え？」

ギギギ、と茶々丸ですら行わないような鈍い動作で顔を上げる。

三月三十一日？

（いや、いやいやいやいや。待て、何だそれは！）

「な、何かの間違いとかじゃないのか！？」

「お言葉ですが、それは有り得ません。今日は間違いなく三月三十一日です」

茶々丸の言葉が無情にも響く。  
すると、なにか。

今日はエイプリルフルでも何でもなくて。私は勝手に勘違いをして、ヤツの言葉を嘘と決めつけて、勝手に憤慨していたと、そういうことか？

あまりの恥ずかしさに赤面する。耳まで真っ赤になっているのが自分でも分かる。

（ま、間抜けすぎる………ッ！）

これでは『闇の福音（笑）』とか言われても文句は言えん。何たる体たらくだ。

それと同時に、顔が青ざめていくのも分かった。

エイプリルフールは明日。

突然意味も分からず追い出されたヤツが明日、何をしでかすのか。その意味を考えて、背筋に冷や汗が流れる。

「マスター？ 顔が何やら紫色になっていますが、大丈夫ですか？」

そりゃあそうだろうさ。顔を赤くすると青くするのを同時に行っているんだ。

そんなことよりも。

(どっ……どうする！？)

このままではログハウスごと宇宙空間に飛ばされかねない。それぐらいのことはやってのける男だ。

「マスター。よく分かりませんが……謝りに行かれた方がよろしいのでは？」

「ぐうっ……し、しかし……！」

誇り高き悪の魔法使いが、他者に頭を下げるなど、プライドが許さない。だが、このままでは最大級の苦難が訪れるのも確かだ。

一時間後。

少年に対して頭を下げまくる悪の魔法使いの姿があったとかなかったとか。



## 番外 エヴァンジェリンの受難（後書き）

自爆オチという。

それよりも、二時間ほど間に合いませんでしたね。残念。

三十一日の夜に

あ、明日エイプリルフルじゃん。やべ、何も考えてなかった。嘘  
つきの真骨頂なのにつ！

と焦りに焦って、ようやく思いついたのがこの程度のお話です。む  
しろ空、正直でしたけどね。

エヴァと茶々丸はまだ出てきてませんが、まあ多少フライングでも  
いっか、と思いこのお話にしました。

楽しんで頂けたなら幸いです。



## 始まりの終わり

「遊びに来ましたわ空ちゃん！」

麻帆良学園本校初等部三年B組の教室に、少女の甲高い声が響いた。

昼休みの教室内がシーンと静まる。が、それも一瞬のこと。声の主は視線が集中したかと思うと、再び教室内が喧騒に包まれた。クラスメート達にとって、この事は既にいつもの事という認識になっているらしい。

そして姉上の姿を見るなり、こっそりと頭を抱える俺。

（また来たよ……）

小学生となってから二年。

最初の頃はきちんと真面目に授業を受けるフリをしていたのだが、一ヶ月で飽きた。今では担任の目を《誤魔化し》つつ、自習を敢行していた。

そんな俺は、入学してからずっと、ある悩みを抱えている。

姉上が、学校でも姉上なのだ。

意味が分からないと思うが、要するに姉上は常時ブラコン全開で、休み時間の度に教室に押しかけてくるのだ。

友達の上条さんやその幼なじみの真仏真帆さん（愛称まほまほ）も、諦観の眼差しで姉上を見つめている。

「ほら、行ってこいよ色男」

「上条さんに言われると物凄く嫌みに聞こえる単語だね、それ。て

いうかやだ」

「ワガママ言っていないでさっさと行きやがれです。余計な諍いさかいが起きてとばっちりを食らうのはこっちなんですからね」

「うーん……。まほまほがそう言うなら」

「誰がまほまほですか。ほら、さっさとしないとまた――」

「ウチの教室に押しかけるのはやめてくださいと何度言えば分かるんですか!？」

まほまほが言い終えない内に、怒声が響く。こちらにぐんぐんと突き進んでくる姉上に、我が三年B組の委員長が立ち塞がって抗議していた。

わーい、修羅場のはじまりだー。

「……また貴女ですか。愛しの弟に会いに行くことに何の問題があると言うんですの?」

「いっ、いとし……。っじゃなくて! 下級生の教室に上級生が日常的に押しかけるのは、どう考えても非常識です!」

「空ちゃんの前では些細な問題ですわね」

「……雪広くんだって迷惑ですよ、そんなの」

委員長の抗議を全く意に介さず、不遜な態度をとる姉上だったが、吐き捨てるような委員長の呟きにピクリと眉をひそめた。

「……面白いことをおっしゃいますわね。空ちゃんが、私のことを迷惑だと思っていると?」

「他にどういう意味があるんですか?」

(ていうか、迷惑云々よりも学校でちゃん付けはやめてくれないかなあ。くれないんだろぅなあ)

二人の口喧嘩を眺めながら、姉上に対する懇願と、諦観による自

己完結を終える。

さて、どうしよう。

この場を仲裁するのは簡単だけど、事後処理が面倒だ。

姉上はブラコン故に御しやすいが、見ていて鬱陶し——もとい可哀想になるくらいしょんぼりとするので、後で宥めなければならぬ。

委員長は委員長で堅物なので、説得が面倒だ。ぶっちゃけ彼女、ツンデレさんだし。責任感とか嫉妬とか、そこら辺の感情から姉上に突っ掛かってるんだろうなあ。

そんな風に、俺の負担とかその後の人間関係とか評価とか、その他諸々を考慮した結果。

この場を《誤魔化す》ことにした。

「ちょうど良かった、お姉ちゃん。渡したいものがあつたんだ」

「えっ！？ 空ちゃんが私に渡したいものですか！？」

「うん。ここじゃなんだから、屋上にでも行こ？」

「し、仕方ありませんわね……。時間ありませんし、早く行きましょう！」

「あ、ちよっ……！ 雪広くんっ！」

※～※～※

姉上を引き連れて屋上に辿り着いた。

麻帆良学園はその膨大な生徒数に反して、運動用の敷地が少ない。それを解消するために、屋上すらもコートとして利用できるようになってる。

屋上の外周には、転落防止用のフェンスが高々と張り巡らせてあり、ボール遊びも難なくできる。

昼休みということもあり、人が居るだろうと思っていたが、予想に反して屋上は閑散としていた。

（……あ、そっか。この前グラウンドを拡張したんだっけ。皆そっちに行ったのか）

まあ、人目につかないならその方が良い。屋上の中央まで突き進む。柔らかな陽射しと涼しげな風が心地よい。思わず目を細める。

「それで、空ちゃん。渡したいものって何ですか？」

しばらく沈黙を保ったままでいると、姉上が堪えきれない様子で切り出してきた。振り返ると、期待した眼差しと、僅かに紅潮した頬の姉上。

渡したいもの、か。

（ねーよ、んなもん）

あの場を切り抜ける為のただの出任せだし。ただ、目をキラキラと輝かせた姉上を裏切るのもなんだか忍びない。

……………ふむ。

と言うわけで、唐突に姉上に抱きついてみた。

「んなっ……！？　な、ななな、何ですの空ちゃん！？」

「んー？　渡したいもの」

「こ、これですか！？」

「うん。今日はまだ充電してなかったでしょ？」

「空ちゃん……」

姉上は俺の名前を呟くと、感極まった様子でぎゅっと抱き締め返

してきた。頬と頬とをくっつけて抱擁を交わす。柔らかな肌の感触と仄かな体温が、姉上の身体から伝わる。

今はまだ、姉上の方が背が高い。中学に入る頃には、追い抜かせるだろうか。

沈黙が二人を包む。言葉は要らない。この行為は、二人の絆を再認する為のものでもあるから。

ややあってから、ゆっくりと腕から力を抜いた。

姉上の顔を見る。姉上も俺を見ていた。

何だか気恥ずかしくて、額と額とをコツンとくっつけながらはにかむ。

「大好き、お姉ちゃん」

「私もですわ、空ちゃん」

いつものように想いを告げてから、どちらからともなく再び抱き合った。誤魔化す為なんて口実は、いつの間にか頭から消えていた。

「ねえ、このか。時々、あの二人が姉弟の一線を越えてるんじゃないかって本気で疑うことがあるんだけど」

「奇遇やなー、アスナ。ウチも常日頃からそう思ってたところやえ」

だから、先ほどから出歯亀よろしく屋上の入り口、扉の隙間から覗いていた二人組の存在を忘れてしまっていた。

「きゃあっ!?! お、おおお二人とも、一体どうして!?!」

「何か用ですか?」

動揺し、慌てて俺から離れる姉上と、しれっと二人に問いかける俺。

アスナは呆れがちに、このかは面白そうにしながら近づいてきた。

「先生にいいんちよを捜すように頼まれたのよ。どうせうつほのクラスに居るだろうと思って呼びに行ったら、屋上に居るって聞いたワケ」

「ほんで行ってみたら、熱い抱擁を交わす姉弟の姿があったモンやからなー。邪魔するなんて野暮な真似出来ひんし、どうしようか途方に暮れとったんや」

「それはお気遣いありがとうございます。姉弟のスキンシップは大切ですからね」

「スキンシップ、ねえ……?」

「ええ。まごうことなきスキンシップですが、何か?」

時の流れと共に、ツンデレに変わってしまったアスナが訝しげに見つめてくるが、俺はもちろん何処吹く風。

現時点で姉弟の枠を越えた行為に及んでいないのは事実だしな。

嘘はついとらんよ、嘘は。

「それにしても、いいんちよ。ここ最近、ずっとソラくんのクラスに遊びに行ってるけど、どないしたん?」

「そうよね。うつほが入学したての頃もそうだったけど、空に注意されてからは自重してたじゃない」

二人の指摘に、俺も頷く。

今年に入ってから、何やら姉上の様子がおかしいのだ。何かに焦っているように、学校で俺と会う時間を作ろうとしている。

何か、理由があるのだろうか。

「そ、それは、その……」

「うん」

「……………から……………ですわ」

「よく聞こえないよ？」

「……っ。空ちゃんと学校で会えるのは、今年までだからですわ！」  
「……え？」

それは少し予想斜め上の理由だ。

「……私と空ちゃんは、三つ歳が離れています。少なくとも大学生になるまでは、同じ学校に通えるのは、今年までですわ。ですから、少しでも多くの時間を空ちゃんと一緒に過ごして、一つでも多く、二人の思い出を作れたかったんですの……」  
(何この可愛い生き物)

顔を真っ赤にしながらもじもじと話す姉上の様子に、俺とアスナとこのかの気持ちが一つになった。

しかし、なるほど。そう言われてみればその通りだった。原作に関わる気満々だったので、そこら辺は忘れていた。

初等部のエリアと中等部のエリアは一駅挟んでいるため、休み時間にもそう簡単に行き来はできない。

まあ、ぶっちゃけ能力使えば一瞬なんだけどな。とりあえずそこら辺は置いて。

「ねえ、お姉ちゃん」

「うう……何ですの？ 空ちゃん」

「今度からは、ぼくがお姉ちゃんの教室に遊びに行くよ」

「えっ？ 空ちゃんが……ですの？」

「うん。また今日みたいな事になったらいけないし。それに、そうすればアスナさん達にも会えるでしょ？」

あと、美少女漁りもできるし。

「なんか、邪念を感じるわね……」

「クラスメートのピンチやな、ハーレム的な意味で」

「そんな、ヒドイです。ただ純粹に、皆さんと思い出作りをしたい  
と思っただけなのに……」

「思い出が良いものだけとは限らないわよ」

「何なら天国に連れて行って差し上げますよ？」

「それ、フツーに貞操の危機やん」

「……わたくしも、あまり賛成はできませんわ」

『え？』

姉上の否定的な意見に、軽口を叩きあっていた俺達は思わず顔を  
見合わせた。

「……い、意外だわ。弟至上主義のいいんちよがうつほの意見を否  
定するなんて」

「明日は美少女が空から降ってくるかもしれへんなー」

「何ですかそのラブコメ的展開。……それよりお姉ちゃん、どうし  
て？」

「だって……」

「うん」

「空ちゃんがウチのクラスに入り浸るようになったら……」

「なんか不穏な言い方だけど、お姉ちゃんも日頃からしてることだ  
からね？」

「クラスメート全員、空ちゃんのあまりの可愛さに一目惚れしてし  
まいますわッ！」

『………あー』

そうだよな。ブラコンだもんな、我が姉は。いくらなんでも全員  
はねーよ。

その後も、姉上はいかに俺が愛らしく素晴らしいかを、午後の授



業の予鈴が鳴るまで延々と語り続けた。

※～※～※

「あー、疲れた。身内自慢を身内に対してやるとか最早嫌がらせじやね？」

なー。

「おお、分かってくれるかチャチャ。俺の理解者はお前だけだよ」

なー。

みー。

にゃおん。

「おっと。お前らも居たな、イチにゴウ。よしよし、今日はちよつと奮発してネコ缶とマグロの切り身だぞー」

うなーっ！

みゃーっ！

にゃーっ！

「うむうむ、仲良く食え。そして俺に胃袋をがちり掴まれるがよい。主に生命線的な意味で」

はぐはぐ。

はぐはぐ。

はぐはぐ。

「まあ、来年の今頃には茶々丸っていう新しいパトロンが現れるかな。俺がどっか行っても心配ないぞ」

うななーっ！

みゃみゃみゃーっ！

にゃにゃにゃぎっ！？

「うおっ！ 大丈夫かゴウ！？ お前今舌嚙んだろ！ 無理な発音するからだぞ。ほれ、見してみ。あー、ちよつと血い出てるな」

黒猫のゴウに手をかざし、呪文を唱える。最近覚えただけの、回復系の魔法。

「プラクテ・ビギ・ナル  
Tui gratiauppter  
汝が為にユピテル王の 恩寵あれ  
cura  
———治癒———」

詠唱直後。仄かに青白い光がゴウを包んだかと思うと、血が出た箇所はあつと言う間に完治した。

ゴウは不思議そうに前足で顔をぐしぐしと洗った後、にゃーと礼を言うように一声鳴いてから、再び食事に取りかかった。

「うし、完璧」

自らの上達を実感する。

橙香姉は、魔術とはただ一度の奇跡を起こす為のものでしかないと云ったが、やはり便利なものは便利なのだ。

誰かを救う為の手段として、魔法という秘蹟を欲してしまうのも無理からぬ話である。

現代において、橙香姉のように真理を探究し、大元の一に至らんとする達人が何人居るといふのか。<sup>アダプト</sup>

……まあ、俺も根源なんてものに興味は無いんだけどな。面白けりゃそれで良い。

なー。

みー。

にゃおん。

「ん？ もう食ったのかお前ら。そっか、食べ盛りだもんな。うしうし、しっかり食ってでっかくなりやがれ」

身体を擦り寄せてくる三匹を撫でながら、お代わりを用意する。

ご馳走に夢中の三匹を眺めながら、俺は目を細めた。

（この頃肥えてきたなあ、こいつら。最初の頃はガリッガリだったのに）

そもそも俺が野良猫に餌を与えるようになったのは、小学校に入学してすぐのことだった。

下校中、痩せ細った野良猫を見つけた俺は、見るに見かねて、たまたまポケットに入っていた煮干しを与えた。

すると、それを目ざとく見つけた他の野良共が群がってきてしまい、そのまま崩し的に餌の面倒を見ることになったのだ。

だって、お前、あんなキラッキラした目で見つめられてみる。もし無視して歩き去ろうものなら三步で罪悪感に胸を押し潰されるぞ。それに俺、猫好きだし。

三毛のチャチャに、白のイチ、黒のゴウ。他にもシャムとかアメシヨとかいっぱい居るが、覚えきれないので名付けていない。

本当は屋敷で飼えるのならそれが一番良いんだけど、生憎と母上

が猫アレルギーなので無理だ。

うななー。

みゃー。

にゃにゃ。

「お、食い終わったか。よし、それじゃ腹ごなしに遊ぶぞ猫ども。  
今日はこれだ、高級猫じゃらし！」

鞆から取り出したそれを取り出し、フリフリと振りかざした。い  
っせいに襲いかかる猫ども。

びょーんびょーん。

うななななーっ！

みゃみゃみゃみゃみゃーっ！

にゃにゃにゃにゃにゃーっ！

「ふはは、貴様ら如きではこの高級猫じゃらしを捕らえるには一万  
年早いわ！」

たしっ。

チャチャが前足を巧みに駆使して猫じゃらしを捕まえた。

「……もう一万年経ったのか」

うな……。

み……。

にゃ……。

「冗談だ。俺をそんなアホの子を見るような目で見るとはじゃない」

うな。  
み。  
にゃ。

「んだコラ、言いたいことがあるなら言ってみやがれ畜生ども！」

そんな感じの放課後。

※～※～※

「……で、どうして貴様がここにいる？」

不機嫌が全身から滲み出たような声音で、黒を基調としたゴスロリ服に身を包んだ少女——エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが問いかけてきた。

ドレスの豪華さとは裏腹に、足元に届くほど長い金色の鮮やかな髪は、編まれてもまとめられてもいなく、洗ったままのようにただ背中にたらしられていた。そこだけ奇妙な野性味が感じられ、その少女の不思議な、小さく美しく物静かなのにどこか凶暴な、独特の空気を象徴していた。

その整った顔。

完璧に美しい顔だちに、長い金のまつげ、弓形に整った濃い金色の眉、ばら色の頬、珊瑚色の唇、それにサファイアの瞳。

彼女が好んで着用するゴスロリ調のドレスとも相まって、ビスクドールのごとき雰囲気を醸し出していた。<sup>かも</sup>むすつとした表情もまた可愛らしい。

どう見ても十歳前後にしか見えないこの幼女は実は中学生で、更に言えば数百年の時を生きる真祖の吸血鬼だったりするのだが詳しく

くは割愛。

俺はと言えば、にゃんこ達と戯れた後、稽古の予定もなく暇だったので、麻帆良の居住区から外れた森にある、エヴァの住むログハウスに遊びに来ていたのだった。

「堅いこと言うなよ。俺とエヴァの仲だろう?」

「どういう仲が貴様との間にあると言うんだ。不仲以外思いつかんぞ」

「ははは、馬鹿だなあエヴァにゃんは。恋仲があるじゃないか」

「誰がエヴァにゃんか!　そもそも誰と誰が恋仲だこの色情魔!」

「照れんなよ☆」

「こっ、殺したい……………ッ!」

ぶるぶると殺意に震える彼女の肩に合わせて、ウェーブのかかった長い金髪が小刻みに揺れる。

何の連絡もなく押しかけたこちらにも非はあるのだろうか、もう少し愛想よく応対してくれてもいいだろうに。

何だかんだでにゃんこ達と同じくらい付き合いが長いというのに、未だに仔猫<sup>キティ</sup>は俺になついてくれない。

「オチツケヨ、御主人」

パタパタと羽音と共に現れた殺戮人形が、良いように弄<sup>もてあそ</sup>ばれる主人を諫<sup>いさ</sup>めつつ、俺の頭にちょこんと着地した。

上目遣いに見上げると、三頭身ほどのちんまいボディに、主人と同じく黒のゴスロリ服を纏った緑髪の人形の姿が見える。

「よう、チャチャゼロ」

「オウ、ヨク来タゼ詐欺師。ソロソロ魔力が切レツカラ寄越シナ」

「お兄ちゃんと呼べば考えてやらんこともない」

「オニーチャン、俺ニオニーチャンノ魔力タクサン注イデ欲シイナ☆」

「よーし、お兄ちゃん頑張っちゃうぞー」

「……何をやっとするんだ貴様らは」

俺とチャチャゼロの仲睦まじい様子を嫉妬深く睨み付けてくる金髪少女。

「嘘をつくな嘘を！」

「おいおい、地の文にツっこむのはマナー違反だぞ？ メタ発言は嫌いじゃないけどさ」

「イヤ、単ナル吸血鬼ノスキルダゼ？」

「……ああ。そういやそんな設定があったな。ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』とか随分昔に読んだっきりだわ」

正確には前世だけど。

「設定言うな。……まあ、ドラキュラ公のそれは正しく設定だがな」  
「もし真祖の吸血鬼がブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を読んだら」

「どんな『もしドラ』だそれは」

「オニーチャン、俺ハ皆殺シガイイナー」

「任された」

「任されるな！ ええい、チャチャゼロもいい加減その呼び方をやめろ！」

俺とチャチャゼロの仲睦まじい様子を嫉妬深く睨み付け「しつこいわ！」てくる金髪少女「無視か貴様！？」。

「お兄ちゃんと呼べば考えてやらんこともない」

「どんだけ呼ばれたいんだ貴様は!？」

本気で気持ち悪そうにドン引きしながらこちらを見てくる洋口リ。  
やだなあ、興奮するじゃないか。あながち嘘でもない。

「……実は俺、病気で死んだ妹が居てさ。お兄ちゃん、お兄ちゃん  
って、いつも俺の後ろをくつついて回って……。エヴァやチャチ  
ヤゼロを見てると、妹を思い出すんだよ」

先ほどまで心底愉しそうに嗤わらっていた表情が翳かげる。遠い過去を思  
い出すように、寂しそうに、儚はかなげに笑った。

「空……。貴様にそんな過去が……?」

「まあ嘘なんだけどな」

「嘘か貴様アアあああああああああああああああああああああ  
あああああッ!」

怒りの咆哮と共に殺意を爆発させて襲いかかってくるエヴァをバ  
ックステップでひよいと躲かわす。その拍子に頭に乗っかっていたチャ  
チャゼロが放り出されるようにエヴァの前に躍り出た。

「どけチャチャゼロ! そいつを殺せない!」

「オチツケ御主人」

背中の蝙蝠こうもりの翼もつで以て宙に浮きながら、主人を宥める従者。

思うに、エヴァは年齢の割に老獯あさむさや狡猾さが足りないのではな  
いか。いくら俺が偽り、騙し、欺く為だけに生み出された存在とは  
いえ、年の功で見破れそうなものだが。

精神など肉体の奴隷にすぎないとニーチェは言っているが、これ  
は精神的な若さというより、彼女が本質的に純粹であるからだろう。



自らを悪の魔法使いなどと自称するのも、生来の純粹さからくる偽悪的な性格の現れとも言えるし、結局のところ、根はただの恋する幼女なのだ。少女ではない。

などと戯言めいた思考はさておき、魔力を封じられている主人の代わりに、チャチャゼロの魔力供給をすることにした。

「アンマ巻キスギンナヨ」

「巻くぜー、超巻くぜー」

「聞ケヨ」

殴られた。



「やれやれ、ようやく帰ったか」

夕暮れのログハウス。

ヤツの去った後、窓際に備え付けてあるロッキングチェアにすっぽりと埋まるように腰掛け、ため息を一つ。

何とはなしに、どこか寂寥感の漂う外の風景を眺めながら、紅茶を啜る。<sup>すす</sup>

（……む。相変わらず、紅茶を淹れるのだけは上手いな）

二年前に空と出会ってから、ヤツはほぼ毎日のようにウチを訪れる。

やりたい放題に振る舞い、好きなだけ私をからかいつつも、空は頼まれもしないのに私の身の回りの世話を焼いてくる。

炊事洗濯掃除、挙げ句の果てにマッサージまでしてくる。しかも上手い。

別荘内ならいざ知らず、呪いのせいで従者の人形すら満足に扱えぬ不甲斐ない私を一切笑わず。どこまでも献身的な振る舞いを見せるといふ矛盾した行為をとる空に対して、当初は言い知れぬ悪寒を感じたものだが、今では慣れてしまった。

そう、慣れてしまったのだ。

いくら憎まれ口を叩こうとも、私は空に依存してしまっている。

ヤツの居ない生活など、想像もできないほどに。

このままでは不味い。

空に主導権を握られ続けることがどれだけ危険か、ヤツの本性を知る者なら核爆発をその身に受けるより明らかだ。

初対面の時を思い出す。

ヤツはあろうことか、能力を使ってナギに成りすまして近づいて来たのだ。おまけに外見を《誤魔化す》ではなく、相手の認識を《誤魔化す》——確か『身気楼』ミライジヨブナイルとか言ったか——技を用いて、だ。橙香から空の能力の欠陥を聞いていなければ、今頃どうなっていたか。想像すらしたくない。

とは言え、故人に成りすますなどという下策をとったからこそ対応出来たことだが。もしナギの計報を耳にしていなければ、きっと私は素直に騙されていただろう。

……まあ、アレは外道ではあるが、己が内に守るべき規律はあるようだし、きっとそのまま無様に泣きついたとして、優しく慰めた後で心底馬鹿にした声で嗤うだけだろうが（その時点で既に最悪であることに、ヤツは気づいていて尚、なお嗤うに違いない。正しく外道だ）。

それはともかく

閑話休題。

従者を、増やすべきなのだろう。それも、動力部分以外を魔力に依らない、カガクの力によって動く機械人形を。

先日私の元を訪ねてきた、二人組の小娘。名は超鈴音と葉加瀬聡

美だったか。

私が『吸血鬼の真祖』<sup>ハイ・デライトウオーカー</sup>であることを知っていながら、計画だか何だか知らんが、それを遂行する為に私に近づいてきた、空とは別の意味での命知らず。

二人の持ちかけた提案は、私にとって渡りに船と言えた。魔法の知識を教授する代わりに、従者を一体提供するというのだ。

話を聞いた時は、カガクの産物であるロボットという、未知の領域の存在に対して抵抗を示し、返事を遅らせていたが。

良い機会だ。

このエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが、胃袋を掴まれた程度で籠絡されると思わんことだ！

その従者がいとも容易く籠絡されようとは、この時の私は予想だにしていなかった。

※※※※

「あら、お帰りなさい。随分と遅かったけど、寄り道もしていたの？」

「……橙香姉？ 帰ってたのか」

帰宅し、自室にたどり着いた俺を待ち受けていたのは、普段滅多に屋敷に居ない雪広家の長女だった。

天蓋付きのふかふかベッド（姉上の趣味）に横になっていた状態から起き上がり、「んっ……」と伸びをひとつ。あくびのせいかな、目元にはうっすら涙。

彼女が普段愛用しているワイシャツは、くつろぐのに窮屈だった

のかボタンが三つほど外されており、チラリと覗く胸元や、気怠く眠たげな表情が妙に艶かしい。

「ふぁう……。んー、美奈の状態を見ておきたかったし、それにたまには顔を出さないと母さんもうるさいのよねー」

「いっつもフラフラしてるからだろ。母上からすればさっさと身を固めて欲しいんだろうよ」

「あーあー聞こえない。まったく、弟にまで口出しされたくないわよ。家なら父さんが引退する頃には継ぐって言ってるんだから、それまで自由にさせてくれたって良いじゃないの」

「親の心情からすればそういう問題じゃないんだろ。さっさと孫の顔が見たい、とかさ」

「うわ、そういうのが一番ウザいのよね」

本気で嫌そうに顔をしかめる。

年頃の娘が浮いた話一つなく人形ばっか作っていれば、余計な世話の一つや二つ焼きたくもなるのだろう。知らんけど。

「ま、橙香姉が男になびくなんて異次元めいて想像できないけどな」「――はつきり言うわね。言っておくけど、これでもモテるんですからね。ただ、これといった相手がいないだけで」

「モテないとは言ってないだろ？ 男になびくのが想像できないって言ったんだ。橙香姉が美人なのは昔から知ってるよ」

臆面もなくそう言うと、橙香姉は軽く身をよじった。何やら顔色を悪くして、両腕で身体を抱いている。はて、風邪でもひいたのだろうか。と、鈍感主人公っぽく振る舞ってみる。ベクトルは真逆だが。

「……そういう台詞はあやかだけにして頂戴。鳥肌が立つでしょう」

「知ってるけど？」

「そう、確信犯なの。残念ね、せっかく魔法世界に連れて行ってあげようと思っていたのに」

「お姉様。卑しい私めにできることがございましたら、何なりとお申し付け下さいませ」

「そう？　なら、マッサージでもお願いしようかしら」

「ありがたき幸せ」

再びベッドにうつ伏せに寝転ぶ橙香姉に憎々しげな視線を投げかけるも、内心は狂喜乱舞だった。いや、実の姉の身体に触り放題という事実に興奮している訳ではなく。

「んっ……そこお……。ん、ふっ……。なかなか、上手い、のね………んんっ」

……興奮している訳ではなく。

「ふあ……。エヴァはこんなのを毎日されてる訳か。それなら、文字通り骨抜きにされてもおかしくはないものね」

「いや、ナギの存在が思いの外大きくてな……じゃなくて。なんでんなことまで知ってるの？」

「一応、数少ない友人だもの」

「そーでしたねー。他人の能力とその欠陥を勝手にバラしてくれやがりましたもんねー」

抑揚をつけて指圧する動きに合わせて、ベッドに膝を乗せている部分が体重で沈む。

エヴァと橙香姉。

人形使いと人形遣い。

吸血鬼と魔術師。

人形師同士でお互いに何か感じとるものがあるのか、はたまた永い時を生きる吸血鬼の有する、遙か昔に廃れた魔術に関する知識に橙香姉が目をつけたのか。

経緯はどうあれ、エヴァンジェリンと雪広橙香は親しい間柄にあった。

話を聞く上では、エヴァは橙香姉をやや苦手としていたようだが。

「なあに、まだ根に持ってるの？ 誤魔化しを見破られたうえで言霊を紡がれると能力が解けちゃうことと、能力の同時使用ができないってことを話しただけじゃない」

「根にも持つわ。弱点をどストライクに捉えてるじゃねーか」

「そこを何とかしてのけるのが嘘つきの仕事でしょう？」

まーそうですけどねー。

それでも釈然としないものがあることを分かって欲しい。

「にしても、なんでエヴァの従者みたいな真似してるの？ 本気で気味悪がってたわよ、あの子」

「いや、たいした理由はないけど……」

「一服盛ってイロイロするためとか？」

「違えよ！ あんなロリに欲情するわけねえだろうが！ つーか美奈さんと同じ勘繰りすんな！」

「あら。あの子貴方の前ではそんな茶目っ気見せるのね。妬けるわあ」

エヴァの家に通うようになって、帰りが遅いことを心配する美奈さんに嘘を交えつつ事情を説明すると、ポツと頬を赤らめながら『その……小さな女の子を襲うのはめっ、ですよ？』とか言われた。不覚にも萌えた。

「そうじゃなくてさ。ほら、茶々丸のことは教えただろ？」

「んーと、確かゼロちゃんの姉妹機のガイノイドだったかしら。それが？」

「要するに、繋ぎだよ。彼女が出来るまでのな。それくらいまでなら、世話を焼いてやっても良いかな、と」

ほら、アイツ六百歳超えてるくせに生活能力皆無だからさ、と言うと、橙香姉は何やらニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべながら、こちらを振り向いた。

「……なんだよ」

「きちんと大事なものを見つけられてるようで安心したのよ」

そう言っ、橙香姉はますます笑みを深める。手のかかる弟を見るような目はやめてほしい。

「あ？　なんだそりゃ？」

「分かってるくせに。それとも、分かりたくないだけかしら？」

「……知ったような口を」

「利くわよ。姉だもの」

舌打ち。マッサージをやめて、ベッドから下りる。

「あら、怒っちゃった？」

「別に。良いからさっさと本題に入れよ。魔法世界がなんだって？」

苛立たしげに催促すると、起き上がった橙香姉は眼鏡を外しながら、

「ああ、それか。三年ほど向こうで活動しようかと思ってな。美奈を連れて行っても良いんだがね。可愛い弟に経験を積ませてやるの

も一興——もとい、姉の役目だろう？」

などと言った。

余談だが、美奈さんは橙香姉謹製の自動人形である。その気になれば戦闘もこなせる万能メイドなのだ。

初めて知った時は、あまりのショックに丸一日寝込んだものだ。かつての姉上の気持ちが少しだけ分かった。言うまでもなく嘘だけだ。

「つまり、仕事を手伝えと？」

「そうなるな。ああ、報酬と言ってはなんだが、アリアドネーの総長に口利きをしてやろう。あそこは西洋魔法を学ぶ上では最高の環境だからな。何より、真理を探求せんとする輩が多い」

西洋魔法使いを嫌う橙香姉にしては、珍しい発言だった。西洋魔法は精霊の使役に特化している。精霊とは、世界の一部。故に、精霊を介して真理の探求を目指す魔法使いが居るのだと言う。

「そりゃありがたいけどさ。一応俺、学校があるんだが」

「サボれ」

「おい」

平然とひどいことを言うなこの姉は。

「ならアレだ。三年経ったら時間軸でも《誤魔化せ》。それで構わないだろう」

「んー……。自転周期とか公転周期を計算に入れる必要があるから面倒なんだよな、あれ。転移魔法符を併用して使えば問題ないんだけど、高いし」

「私からすれば八十万はむしろ安すぎると思うがね。いつそ自作し



てみてはどうだ？ 魔法世界あちらの符術はお前の能力との相性も悪くないだろう」

「考えとくよ」

転移魔法符からも分かるけど、魔法世界の符術って、道教のそれと違って呪符に魔法を封じ込める技術なんだよな。呪符に式神が宿ってる訳でもないし。それなりに力量の伴った魔法使いじゃないと、身につけても大した武器にはならない。

要するに、まずは西洋魔法の修得から始めなきゃいけないってこと。いくら俺が天才と言えど、上位古代語呪文ハイエンシエントを勘で使えるほど人間を辞めちゃいない。

というか、元々の魔力量がそう多い訳じゃないから、ナギみたいな力任せの発動ができない。きちんと術式を理解した上で、効率的な魔力運用を図る必要がある。

「では、それで良いな？」

「仰せのままに、ご主人さまマイマスター」

## 始まりの終わり（後書き）

魔法世界突入のお知らせ。

次回はアスナがメインの番外編です。

## 予告編

One Liar in the different World.  
——異界へと舞い降りた、一人の嘘つき——

「ハッ……！ 人形遣いにパートナーが出来たって噂は本当だったのかよ！」

「正確には使い魔だけだな。人使いが荒くて困ってるんだ。なあ、少しの間目を瞑ってるからさ、その間に俺のご主人様をサクッと殺っちゃってくんない？」

Training and Class. ——修行と授業——

「悔しいなあ。なんで、こんなに違うんだろ……」

「努力することでは拭えない悔しさというものがあります。腐らず、驕らず、精進してください。」

——俺は、そういう人が好きですよ？」

The Liar meets the Doll. ——嘘つきは  
人形と出逢う——

「君とは良い関係を築けそうだよ」

「同感だ（ハーレムの意味で）」

The Girl waits for the Liar's  
return alone. ——少女は一人、嘘つきの帰還を待つ

「まだ、ですか？ 空ちゃん……」

「———ただいま。お姉ちゃん」

The story accelerates. ——物語は加速する——

People hold solitude and sadness  
respectively. ——それぞれに悲しみと孤独を抱えて——

「さてさて、つまらなくなってきたがった」

「人生なんてそんなものだろう」

「過度な期待は厳禁——ってか？」

嘘つきと主人公が出会う時、物語は始まる――。

To be continued.

However, it is a lie.――嘘だけど――

## 幕間 アスナの教訓

「偉い人は言いました。人間は考える葦<sup>あし</sup>であると」

学生寮のとある一室。

ピンと小さな人差し指を立てながら、うつほが何かの受け売りを話し出した。

「足？」

「足じゃなくて葦です。つまり、飛べない豚がただの家畜であるのと同じように、思考を止めた人間はただのイネ科の多年草であるということです」

うつほの言っていることは相変わらずよく分からない。

「草……なの？」

「ええ。豚にも劣ります。食物連鎖的に考えて」

「しょくもつれんさ？」

「植物は草食動物に食われ、その草食動物は肉食動物に食われるといった関係ですよ」

……えっと。

「じゃあ、うつほも私を食べるの？」

「なんというカニバリズム……。あはは、アスナさんが大きくなったら、別の意味で美味しく頂いちゃうかもしれませんね」

よく分からないけど、大きくなったら食べられちゃうらしい。…

…どきどきわくわく。

「ま、それは置いてですね。物事をよく考えるためには、たくさんの方のことを知らなくてはいいけません。どうしてか、分かりますか？」

「んと……。間違えない、ため？」

「それも一つの答えですね。たくさんの方のことを知っていれば、それだけ判断材料が増えますから」

「じゃあ、正解は？」

「これはぼくの持論ですが、物事を多角的に考えられるようになるためです」

……多角的。色んな方向から考えるってこと、かな。こっさりガツポーズ。

「……それで？」

「勉強しましょう」

「だが断る」

くるりと方向転換し、逃げ出す。

回り込まれた。……このかに。

「う、裏切りものー……」

「アスナ、こないだのテスト散々やったやろ？ ソラくんを教えてもらいーな」

「うー……」

勉強は、めんどくさいから嫌い。

それに、三つも年下のうつほに教えてもらうのは、なんかしゃくだ。

そんなふうに渋っていると、うつほは仕方ないものを見るような目で、背伸びしながらよしよしと頭をなでてきた。

「……子供扱いするな」

「賢くなったらやめてあげます」

余裕綽々の態度がむかつく。

ふと、反撃を思いついた。

きつとあたふたして取り乱すに違いない。

「……あれ、アスナさん？」

唐突にぐっ、と両手でうつほの頬を包むように掴んで、顔を近づける。

「え、えーと？」

困惑して焦り気味のうつほの唇を奪おうとして——何となく、そのまま急上昇。

ぺろり。

うつほの眼球を舐めてみた。

「ぎにゃああああああああ！？」

パンツ、と凄い勢いで突き飛ばされた。

たたらを踏んで立ち止まってから、感触を思い出すように自分の唇をぺろり。

ぐにぐにしてて、しょっぱかった。

「な、ななな、何してんですか！？」



「……キス？」

「なんでそこで眼球!？」

「驚くかと思って」

「予想斜め上すぎるわ!」

よっぽど衝撃的だったのか、敬語が崩れている。後ろにいたこのかも、驚きのあまり言葉も出ないらしかった。大成功を確信。

「でも、メロンソーダの味はしなかった」

「当たり前です!　　というか本気でカニバリズム!？」

うつほの目は、メロンソーダみたいだし、透き通ってて美味しそうだから、しゅわしゅわするかと思ったのに。……残念。

「無邪気って怖い……」

「ウチ知つとるえー。ぷれい、ってヤツやろ？」

「違います……」

なんだか疲れた顔をしてる。

いつもからかわれてばかりだから、仕返し。……あれ、怒ってる？

「アスナさん」

「……な、なに？」

「勉強、やりますよね？」

「だ、だがことわ」「ったらアスナさんの全身を舐めまわします」

「わーい、勉強がんばるぞー」

教訓。

よく考えてから行動しよう。



## 幕間 アスナの教訓（後書き）

ひたすらイチヤイチヤする話を書こうと思ったけど思いつかなかつたのでネタに走る。

テーマは幼さ故の過ち。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9171r/>

---

うつほ物語。

2011年11月17日04時42分発行